

# Sparkling Spirits

だから | スパークリング・ワインなんて生ぬるい。

余熱冷めやらぬすり鉢の底は、絶えることなく稼動を続けていた。変則的な交差点を群れをなした車輛が横切つてゆく。交差点を包囲する人垣は刻一刻と膨張の一途を迎つている。若者が多かつた。複数の国の外国人の姿も散見することができた。ローティーンの集団もいた。容姿とファッショングちぐはぐで、明らかに群衆から浮いていた。四人連れだというのに会話もせずにおどおどと辺りを見回している。どの方角に視線を向けても、ヒトの塊が視界の大半を埋めた。民族楽器の音色が鳴り響き、パンクバンドのドラムスが生温い空気を劈く。屋台のジエネレータの唸りに背後の駅舎から漏れてくるジングルに呼び込みのトラメガといった雑音が人々の細胞を震わせる信号のようにおもえてくる。

すつとすり鉢の底ががら空きになつた。ややあつて、人垣が雪崩を打つた。待ち人は、三々五々、進路をとつた。忽ちにして、人々が入り乱れ、無数の軌道が縛れ、喧嘩あいながら、擦れ違つた。

二十代半ばと思しきその男は、索然とした様子で駅の方へ歩きはじめた。一八〇セントチを超える長身だ。瘦せているが、タンクトップから伸びる腕は隆々たる筋肉に覆われていた。バイクヘアを搔き筆りながらも、前方をしかと見据えていた。

駅を背にして歩きはじめた女がいた。二十歳前後だろう。随分と胸元の抉れたキャミソールに着古したジーンズという出で立ちだ。レンズの大きな、グラデーションのサングラスを掛けている。グラデーションの奥底から覗く切れ長の双眸の放つ視線にはインパクトがあつた。

二人の距離が縮まる。男は肩をいからせていた。女のキャミソールは背中を顕わに

するデザインだった。女の背で龍が踊っていた。

二人は何気なく擦れ違った。

必要最小限の照明の点された店内の一画に、十数人の青年が横に列び、彼らの前には三人ほどが立ちはだかっていた。皆、トラディショナルなものではなく我流の盛装をして妍を競っている。

「ルーキーを紹介する」

マネージャーは頸を振つて貌を覆おうとした長い髪を振り払い、顎をしやくつた。横列の端から一人の青年が前へ出て、横列を振り返つた。

「モトハルです。よろしくつす」

頭を下げた長身の新人とは、元春だった。

意外とスース姿が様になつていた。

野太い横列の返答の唱和が駄した。

初日は慌ただしく過ぎていった。序盤こそ

出足が鈍かつたものの、あれよあれよといふ間に席は殆ど埋まつた。

数時間、元春は店の片隅で直立して氷の交換やメッセンジャーといった雑務をこなした。客の出入りに際しての唱和にも加わつた。コロンとパフュームの混じつた匂いに幾度となく咽せそうになつた。

「次の客きたらヘルプな」

通り掛かりに元春に声を掛けたのは平均的な売上のハルキだつた。元春はハルキのつべりとした笑顔に違和感を覚えつつも愛想笑いで応えた。

間もなく、二人組が入ってきた。二人組が席に案内されている間に、元春の許へ再びハルキが現れた。

「じや、よろしくくな

元春は困惑しているようだつた。

「あの

「なんだ

「アイツらハタチ前つすよね？」

ハルキは訝しげな表情で元春を見返した。

「きょうび、よくある光景だろう?」

ハルキは踵を返してボックスへ向かつた。

釈然としないまま、元春はハルキを追つた。  
サトミもミカも太い脚を恥ずかしげもなく  
晒している。貌だちこそ違えど髪形や服装は  
そつくりで外国人には見分けがつかないかも  
しれない。立ち振る舞いが実年齢にそぐわざ  
に傍目には滑稽でさえある。

「それにしてもさー口クなオトコいないよ

ねー」

サトミが溜め息混じりにぼやいてみせた。

容姿は十人並みだが、妙に自信に充ちている。

「だよねー」

ミカは横柄に煙草の煙を吐きだしながら相

槌を打つた。

ハルキと元春は、律儀に聴く振りをしてい

る。

「三・三万の安物のアクセサリ贈るなんて嫌  
がらせだよ」

「云える

「つーかカネねーんなら夢見んなつてんだ  
よ」

「そういやこの間さ、サトミがアンタだつ  
たら自殺するよつてくらいのブサイクがさ  
告つてきやがつてさ、ソッコー云つてやつ  
たよ。『無理』つてさ

サトミとミカは、哄つた。下卑たそれ  
だつた。

「カネに糸目はつけない、みたいな生活し  
てないとき、貧乏が板についちやうんだよ  
ねー」

「うんうん、お里がしけぢやうつてね」  
「よくそんな安い服で道歩けるねーみたい

なヤツ、死なねーかな

「それサンセイ」

「よくなさ、カネ持つてねーヤツに限つてさ、  
『カネじやない』とかほざくんだよね。

つーか、稼いでから云えつての」  
無知で恥知らずで能無しのくせに口だけ

は達者だった。明らかに自意識が過剰で自己愛ばかりが強烈だった。

索然とした元春はハルキの横顔を盗み見し

た。ハルキは平然としていた。貌にうつすらと笑みを湛え、追従して頷いていた。元春は舌を巻いた。

不意に店の一画で歓声が爆ぜ、俄に店内が慌ただしくなった。

ブックります

店じゅうに聴こえるアナウンスだった。店じゅうの視線がそっちに集中した。震源は、一人の女性客に対して四人のホストがついているボックスだった。女は三〇前だろうが、若さを損なっていた。肌に張りがなかつた。努めて陽気に振る舞おうとしているものどころか空々しく、痛々しかつた。彼女を取り囲んだ連中は彼女の亀裂に気付かない振りをして彼女を担ぎ続けていた。

アナウンスに呼応し、席ごとに散り散りになつてホストたちが「ありがとうございますま

す」と唱和した。

「けつ、ソープ嬢がよ」

「ビヨーキ持つてんじやないの」

サトミとミカが毒づいた。

サトミが新しい煙草に手を伸ばした。

忌々しそうな手つきだつた。元春はお買い

あげの余韻を引きずつていて、即座に反応することができなかつた。

「ちょっと

怒氣を孕んだ声が発された。元春は慌てて、煙草に火を点けた。グラスも半分ほどになつていたが、元春はそれが問題だと認めていた。サトミが怒りだす前に、ハルキがサトミのグラスに手を伸ばした。「アンタさ、新入りのくせに何ハルキに酒つくらせてんだよ」

元春の頬が微かに強張つた。元春は、ガキの貌を見据えた。空氣の硬直を敏感に察したハルキは、慌てて、フォローに入った。「こいつ、初めてだからさ。おおめにみて

やつてよ」

サトミは、まだ何か云いたそうだったが、矛を収めた。

二人組を見送つてから、元春はテーブルの後片付けをはじめた。アイスペールとグラスを抱えて通路を通り抜けた。洗い場に入るや、背後から衝き飛ばされた。持ち前の運動神経でまともに転倒することは避けた。ぶつかってきたのは、ハルキだった。ハルキは憤怒を湛えていた。尻餅をついたまま、元春はハルキを不思議そうに見上げていた。

「新入り、遊びでやつてんじやねえんだぞ」

ハルキが蹴りを放った。勇ましかつたが、素

人の蹴りは単なる脚の運動に過ぎなかつた。元春は思わずハルキの靴を手で受け止めてしまった。

「このやろう」

ハルキが足を引っ込めてから、再び、蹴りを放つた。変則的な蹴りで、今度はキヤツチ

できなかつた。爪先が元春の脇腹にめり込んだ。さほど痛みはなかつた。それよりも怒りが上回つた。元春は起ちあがりざまにハルキの顎めがけて頭突きを喰らわせた。いとも容易くハルキはダウンした。

「人が下手に出でりやいい氣になりやがつてよ」

更なる攻撃を加えようとしたとき、他の連中が静いに気づいた。四方から駆けつけた従業員らによつて元春は羽交い締めにされた。

「何やつてんだ」

「離せ」

「落ち着け」

最初に元春の背後に立つたホストは事故だつたものの顔面に肘打ちを喰らい、その場に蹲つた。

裏口に放り出された。衝き飛ばされた元春は、ファイティングポーズをとろうとし

た。だが、三人の若手が一斉に迫ってきた。

フクロにされた。

非常口の金属の扉が高い響きをあげて閉ざされたとき、元春は檻櫻のようにされていた。

「そろそろ棲むところ探してくれよ」

室の主に背を向けて寝ていた奈津樹はすこしだけ瞼を開いた。だが、振り向かずに頷いた。室の主は、五代といつた。眼鏡をしている。一八〇を越す長身で、アスリートと見紛うほどの体格だ。仕立てのよいスーツを着込み、ネクタイを整えた。アタッシュ・ケースを手に提げ寝室を出ようとして、立ち止まつた。財布から札束を抜き取りナイト・テーブルに放つて、今度こそ寝室を出た。やがて、玄関ドアの開閉音が寝室まで聴こえてきた。

シーツから伸びた腕を眼で辿る。肩に麒麟が彫られている。漸く奈津樹は緩慢な動作の寝返りを打つた。ゆっくりと瞼を開くと、大

粒の眼が露わになつた。その眼は、透き通っていたが、獣の無垢さで、御しがたい剣呑さを帶びていた。台に載つた紙幣の束を眺めながら、奈津樹は軽い溜め息をついた。

互い、別に感情は微塵もなかつた。二人の絆は契約に過ぎなかつた。奈津樹の溜め息は、悲嘆ではなく億劫そうなそれだつた。眠気覚ましの一服を終えると、悠然と身支度に取り掛かつた。

シーツから這いだした奈津樹は、下着姿だつた。スリムで、四肢が細くて長い。乳房は小ぶりだが形のよい形を成している。すっかりブロンドに染めあげられたロングヘアは真っ直ぐに伸びていた。

五分後の奈津樹は、上はミヤミソール、

下は丈の短いジーンズだつた。

手荷物は少なかつた。ケリーバッグに着替え数点と化粧ポーチと携帯電話の充電器を収めるだけだつた。

咥え煙草で、ナイト・テープルに歩み寄つ

た。手切れ金を数える。紙幣は二一枚あつた。室を出てゆく前に、リビングに立ち入つた。壁際に置かれた棚に貴金属や宝石類が陳列されていた。五代は一々チェックしているふうでもなかつた。このマンションは嚴重なセキュリティがセールス・ポイントの一つだつたため、保管方法に頓着しなくともよかつた。奈津樹がマンションの廊下に現れた。さばさばした様子だつた。力強い歩調で、エレベータへ向かつた。

白昼にも関わらず、共同体公認の賭場は盛況を呈している。自動扉が開くやインパクトのある音圧が躰に衝突してくる。喧しい騒音があからさまに射幸心を煽つてゐる。遊戯台の縦列だけでも壯觀だが、その一台々々にヒトが一人ずつ張りついている。物珍しいのだろう、外国人観光客の一団がビデオカメラを

回している。

地階はブラツクライトが多用されていた。闇のなかで、ぎつしりと設置されたスロットマシンが煌々と発光してゐる。ひしめきあう人々の姿は完全には視認できないがスロットマシンの発光により蠢いていることは判る。

昼間に自由行動をとれる若い連中の吹き溜まりだつた。他のフロアと違い、二十代・三十代が大半を占めている。学生あるいはフリーターと思しき若者が多い。女性客が少なくなければ、カツブルでの来店も散見することができる。外回りをサボつた会社員も混じつてゐる。

元春がいた。

咥え煙草で遊んでゐる。レバーをキックして三つのリールそれぞれの停止キーを叩く一連の動作はこなれていた。それもそのはず、この一年間というもの、元春はスロットで喰つていた。受け皿にはメダルが

山積みになつていた。

レバー操作により、再三、三つのリールが始動した。やはり元春は軽やかに最初のキーを叩いた。平素のキー操作では発されないサウンド・エフェクトが発生した。元春の貌が綻んだ。慎重に次のキーを叩いた。リーチが掛かつた。息を呑み、狙い澄まして、最後のキーを叩いた。見事にゾロ目が揃つた。元春は指を鳴らした。

メダルの洪水が受け皿を襲う。キー操作をしながら受け皿からメダルが溢れないように頻りに片手で均す。元春の貌にマシンの放つ目まぐるしい光線が反射する。元春は上機嫌だ。

ボーナスゲームの余韻が失せ、元春もクールダウンした頃だった。

「スロット強いんだ」

女の声がした方を元春は振り向いた。見ず知らずの、セミロングヘアの女だつた。歳は元春より幾つか下にみえた。脱色を繰り返し

たせいか髪の毛先が傷んでいる。化粧の下の吹き出物があどけなさの名残のようだつた。

「まあな

元春は照れ笑いを零しながらもリールに視線を戻した。元春のつれない反応に鼻白みながらも女は二の句を継いだ。

「ね、祝勝会しようよ？」

女は、努めて活発な口調で提案した。元春はゆっくりと女を見遣つた。不敵な笑みだつた。

軒を連ねるラブホテルのうちの一棟から、元春と女が現れた。

「ね、連絡先交換しよう？」

云わせも果てず、元春は女の唇をそつと塞ぎ、応えに代えた。

元春は歩きはじめた。やがて、名残惜しそうに元春の後ろ姿を凝視していた女も、元春とは別の方向へ歩きはじめた。

年が少女に貌を寄せた。少女は拒まなかつた。少年の手が際どい箇所へ伸びた。

訪れた客たちはダンスフロアに引き寄せられてゆく。ダンスフロアにひしめく群衆は、いつか、内と外を隔てる輪郭を解き放たれてアメーバ状になつてゐる。細分化され再構築された音楽とそれに呼応する閃光がダンスフロアで蠢くアメーバに降り注ぐ。D Jの卓捌きによつて曲が意外な展開をみせると、歓声があがつた。巨大なアメーバは、サイケデリックなモザイク模様をしてゐる。不随意に、波打ち続けてゐる。

カラフルな照明に乱射されながら、奈津樹も踊り続けていた。肩の麒麟も生を受けたかのように躍動している。汗に濡れた肌が艶やかだ。仰け反ると、髪が滑り落ち、白いおとがいが覗いた。奈津樹は陶酔した様子で光と音楽と融けあつていた。

初対面の少年と少女が躰をぴたりとくつつけて踊り続けていた。金のスパイクヘアの少

牡どもは性的快感さえ惹き起こす奈津樹の舞踏に軽く狂つっていた。だが、誰一人として奈津樹に触れるとはおろか近づくことさえできなかつた。踊る奈津樹は余りにも神々しかつた。

やはり、アメーバは色とりどりの光を反射しながら波打ち続けていた。D Jは征服感に悦びを覚えつつも平静を装つてゐる。光と音楽の洪水は勢いを保つてゐる。宴は、終わりそうにはない。

一切の外光を遮断した寝室で元春は眼を

醒ました。見覚えのない室に戸惑つてから、ラブホテルの一室であることを思いだした。

例によつてスロットを終えてから通りすがりの女と懇ろになりここで一夜を過ごした。

頸を巡らすと、隣で半裸の女が寝息をたてていた。元春よりも歳上だろう。貌だちや髪形の派手さからして、夜の商売だろう。あるいはフェイクなのかもしれないが長い睫が性的だつた。

元春は思いだしたようにベッドから這いだし脱ぎ棄てた衣服から煙草を取りだし、ソファに凭れた。備えつけのマッチで煙草に火を点け、一服した。

女とは互いに名乗りもせずに寝た。元春も女もすこし酔つていたし、夏のせいでもあつた。煙草が短くなつてゆくにつれ、断片的にだが昨晩の行為を思いだした。元春は照れて、思考を中断した。

体調はよくなかった。アルコールが抜けきつていなかつたし、運動したせいで背筋や

大臀筋が凝つっていた。

もう一本煙草を喫つてから、身支度をして、

女を置いて、室を後にした。

密集した超高層ビルに朝陽が乱反射している。くすんだ色のスーツの大群に混じつて、元春は歩いていた。明らかに浮いており、目立つている。ぼさぼさの頭を搔き筆りながら、緩慢な歩調だ。

駅に入り、切符を買う。誰もがせかせかしている中で元春だけが悠長だつた。元春の後ろに列んでいた欲求不満そうなOLは露骨に不快そうな表情をしていた。

改札付近の混沌が視界に入り、元春は辟易した表情になつた。不承不承、歩を進めてゆく。行列は矩形ではなく扇状になつており、ヒトの流れが激んでいる。マナーは徹底されておらず、割り込みも少なくなければ、前の客に躊躇寄つて煽る者も少なくない。

階段を昇り、ホームへ到る。小集団の横列がホームの端まで埋めている。誰かに命じられたかのように似たような格好をした連中を区別するのは、手にしているのが新聞か雑誌か携帯電話かというだけだ。

いつか元春は慚然としていた。

ジングルが掛かり、電車の到着を報せるアナウンスが流れた。小集団の横列が一齊に身じろぎした。まるでマスゲームに放り込まれているかのようだ。走り込んできた電車も乗客を満載していた。元春は思わず貌を背けた。

手前から奥へ向う扉の列が一齊に開く。開くが早いか怒濤が氾濫した。小集団の横列と入り乱れ混沌を醸した。それが引くか引かぬのうちに、待ち構えていた小集団の横列に入れ替わりで金属の箱に分け入つてゆく。

元春の加わっていた列も流れはじめた。既に乗車率は一〇〇パーセントを越えているだろう。

やっと元春の番だった。見送ろうかと躊躇つた。だが、足の踏み場は辛うじて残されていた。元春は乗ることにした。乗降口の縁に手を掛け、慎重に立ち位置を確保した。もう足の踏み場はなくなつた。

「：番線、ドアが閉まります。ご注意ください」

ホームに一人の会社員が現れ、一直線に乗降口へ駆け込んできた。会社員は元春ら乗降口を塞ぐ乗客たちの貌を見ないようにながら、電車に乗り込もうとした。我田引水もいいところだった。

乗客の間からどよめきが起こり、会社員の躰がホームに転げ落ちた。元春が蹴り出したのだ。

「次にしろ、次に」

惚けたように元春の貌を見上げる会社員を置いて電車は発車した。

三角筋に彫られた麒麟は描写が微細で、

張りのある肌に映えている。

奈津樹は中年と無味乾燥な室にいた。テーブルを挟んで対座している。中年は醜い貌だつた。貌だつても不細工ならば、貌つきもその人格の賤しさを反映していた。線が細く、運動神経も悪そうだった。恨めしそうな三白眼に何とも貧相な貌の造作は不快という以外の感想を喚起しなかつた。中年は奈津樹の履歴書を検めていた。やや奈津樹は畏まつてゐる。

「これからどうするの？」

甲高い声は神経に障つた。たじろぎながら奈津樹は応えた。

「まだ特には……」

「ダメだよ。呑気なこと云つてちや」

云わせも果てず、中年が奈津樹の言葉を遮つた。

奈津樹は頬が引き攣るのを自覚して何とかそれを抑え込んだ。

ラツキーだけでのし上がつてきた見窄らし

い小男は何も気付かずに滔々と喋り続けた。言葉に酔い痴れていた。「甘くないんだよ、世の中つて。今はいいよ。アナタはまだ若いんだからそれだけで買い手がつくもの。でもあと何年かしたら若くなくなつて、汗搔いてないコは誰も見向きもしなくなるんだよ、判つてる？」

奈津樹の顎の付け根が軋んだ。

「仕事できなきやどこも採つてくれないんだから。そうなつたらフリーゾクしかないよ。女の華は短いからね」

鈍感な小男は奈津樹の眼つきが鋭さを増したことに気付かなかつた。

「ウチはちゃんと教育してあげますから、アナタの将来の為になりますということは自信を持つて云えます」

小男はやつと奈津樹の左肩に棲む麒麟を認知した。

「それシール？」

奈津樹の返事に一拍の間があつた。喉が

渴いていた。意識をせねば声が出なかつた。

「マブです」

小男は芝居がかつた渋面をつくり腕組みをして聴こえよがしに唸つてみせた。

「何とかならない？」

虫酸の疾る猫撫で声が奈津樹にとどめをさした。

ならねえよ

バッグを引ったり、席を蹴つた。

宵の口とあつて、街は混雑していた。元春は汗だくになりながら目的地を目指して歩いていた。スプレーを用いた落書きをちらほら見掛ける。通行人は殆どが十代で喧しい。この街の掌の上ではしやぐ彼らは隙だらけだった。

目的地までは緩やかな勾配の坂を昇り降りせねばならなかつた。様々なショッピングが混淆している。オープン・カフェやファースト・

フード店もあれば、テレクラや風俗店も同列に軒を連ねていた。若い声色が飛び交っている。この街のチープ・スリルとの戯れは、波打ち際の遊戯に似ていた。尤も、津波の予兆を識る者は恐らく皆無だろうが。躰を衝く音圧が乱反射する空間に設けられた階段を昇りきると、不意に視界が開けた。大勢が所狭しと詰め掛け、何やら躰を揺すつっていた。二・三フロア分ある吹き抜けの天蓋に設置された投光機が手当たり次第にレーザー光をばらまいていた。

それと判別できないくらいに客が屯する通路を何とか通り抜け、バー・ラウンジに到る。カウンターに陣取つた三人組が元春を視認し、歓迎の態度を示した。元春は三人組と合流した。

元春がオーダーしようとするインカムをつけたボーカイがすかさず元春の口許に耳を寄せた。

「近頃どうよ」

キダは坊主頭なのに金髪だった。

「何にもねえよ」

不精髭のエアリーが元春の返事のつれなさに吹きだした。

「機嫌悪いね」

「どうせまたスロット負けたんでしょー」

ミホが真相を云い当てた。元春はミホを睨んだ。

「ビンゴ」

キダが戯けてミホを指さした。ミホは得意げな含み笑いをつくってみせた。元春は貌を背けた。

「ちょっと行つてくるわ」

キダとエアリーが腰をあげた。「帰つてくるな」と元春は二人を送り出した。

「仕事はどう

元春はついミホを睨み付けてしまった。俄にミホが恐縮したのに気づき、意識的に表情を軟化させてから、親指を下げるサインを送った。

ミホは舌を出してみせた。元春はばつが悪そうにまた貌を背けた。ミホはそつと元春から視線を外しフォールン・エンジエルの注がれたグラスに口づけをした。

貌がちいさい。奈津樹同様、目元が印象的だ。だが奈津樹のそれとは異なり、ミホの大粒のアーモンド型の双眸は蠱惑的だった。だが、その眼つきはどこか投げ遣りで、ともすると凶兆のようにも見えた。

元春のビールが供された。ミホが乾杯を持ち掛けた。元春はグラスを持ち上げるだけで済まそうとしたがミホからグラスを接触させてきた。

「チョーシ狂うぜ」

元春は一口目を呑み込んだ。

ダンスフロアを埋め尽くした連中は絶え間なく軀を揺さぶり続いている。断片化された楽曲は異物として作用し居合わせた連中を搅拌し安定させまいとしている。DJは客を衝き放し黙々と卓を操作している。

「これ持つてて

ミホはハンドバッグを元春に押しつけると

洗面所のある方へ向かった。持ち逃げするぞ、

と独りごちて、ミホの後ろ姿から眼を離した。  
元春の背中にも原色と原形をとどめていた  
い楽曲が降り注いでいた。

人垣を搔き分けてミホが戻ってきた。

フォールン・エンジェルが温くなっていた。

ミホはおわりを頼んだ。すっとミホが元春

の耳元に貌を寄せた。

「分けてあげよつか」

元春は断った。

「程々にしとけよ」

そう付け加えた。ミホは元春の返事に戸

惑ってから、ちいさく頷いた。

「でもさ、コレがなきや、何もやる気になら

ない」

誰にともなく、呟いた。元春は聽こえな

かつた振りをした。

キダとエアリーが戻つてくると、ミホは素

早く対外的な仮面を被り直した。元春はそつと伏し目になつた。

元春もキダもエアリーも去つたが、ミホはバーに居残つていた。琥珀のサングラスが目元を隠している。頬杖をつき、所在なさげにしている。呑んでいるのはフォールン・エンジェルだつた。淡いグリーンが掛かっている。

R & Bでクール・ダウンしてから、奈津樹はダンスフロアを離れ、バーに立ち入つた。奈津樹もミホも同時に相手に気づいた。奈津樹が隣に座ると、ミホはサングラスを外した。アーモンド型の双眸は一点の曇りもなかつたが、どこか脆弱さを感じさせた。

「いつきたの

「たつたいま

奈津樹がフォールン・エンジェルをオーダーして煙草を咥えるとミホが火を差しました。奈津樹は照れながら火を点けて、ミ

ホに訊いた。

「調子どう

「うーん、相変わらず、サイアク」

「左に同じ」

苦笑混じりに奈津樹は煙草の煙を吐きだした。

ミホは全身から気怠さを発していた。プロポーションはよかつたが、とても丈夫にはみえない。一方の奈津樹は、プロポーションもさることながら、スポーティだった。ミホは常連だった。だが、踊らずに、いつもバー・ラウンジで呑んでゆくだけだ。

「今日こそ一緒に踊ろう」

これまでに何度も断られているにも関わらず、奈津樹は誘った。

「やつぱりやめとく」

角が立たないよう配慮された云い方だった。笑ってみせたが、力のない笑顔だった。ふと思いついたようにミホが奈津樹の肩に手を伸ばした。

「カート、元気そうだね」

ミホが麒麟のタトゥーを撫でている。

「だから、勝手に名前つけないでってば」

奈津樹は苦笑する。特に名前はない。

「あー、早くミホも入れたいな」

奈津樹は、平静を装い、聴き流した。

四方八方に設置されたスピーカーは延々と重低音をばらまき続けている。ストロボが焚かれては暗転し、連續したスライド写真が上映されているかのようだ。ありとあらゆる位置にピン・スポットが設置されていて、目まぐるしく狙いを変えている。

煙草の箱に手を伸ばしてから、奈津樹は煙草の箱が空になっていることに気づいた。すかさずミホが自分の細長い煙草の箱を差しだした。

「喫つていいよ

「サンキュー」

煙草に火を点けてから、奈津樹は、我知らず、溜め息をついた。

「どうしたの」

「まず、ミホのせいではないと取り繕つた。

そして、二の句を継いだ。

「いやあ、ここんとこ、マンキツ泊まりが続  
いててさ」

「家、ないの」

「うーん、帰りたくない」

すこし思案してから、ミホが口を開いた。  
「じやあさ、うちに泊まりにくる

思つてもみない提案だつた。

「どこ棲んでたつけ」

「ディズニーランドの傍

「遠慮しとく……」

奈津樹は項垂れた。

朝のラッシュのピークが過ぎた時間帯で、  
繁華街にとつては白夜のさなかのようなもの  
だが、その一角だけは行列ができていた。尤  
も、ビッグイベントのチケット発売を待つ

それとは較べものにはならなかつた。せい  
ぜい、オフィス街にあるファーストフード  
店の行列程度だ。活気がなかつた。まるで  
救護テントにでも並んでいるかのようだ。  
男女比は九対一で、男性が大部分を占めて  
いる。おしなべて服装はラフだ。眠たげな  
貌も少くない。

パチンコ店の開店待ちの行列だつた。行  
列の中に元春の姿があつた。

咥え煙草で頸を左右に曲げ筋肉を解して  
いる。その横顔から、意欲のようなものは  
感じられない。体臭にアルコールが混じつ  
ている。昨晩も寝酒と称して安酒を呷り、  
泥酔して、眠つた。

行列の先頭にいる三人組は四十前後と思  
しき中年らで、開店時刻を待ちきれずに落  
ち着きがなかつた。三人組は、無邪気なま  
でに、賭場が開かれるのを心待ちにしてい  
た。

ふと三人組が元春の視界に入った。元春

の双眸が心なしか翳つたかにみえた。三人組はプロだつた。

やがて、入口が開放された。時々つかえながら行列の長さは削減されていった。

プラックライトの設置されたコーナーは、スロット機がぎつしりと列べられていた。元春は無作為に手近な席に座り込み、剥きだしのままポケットに突っ込んでいた折り畳んだ札束を抜き、そのうちの一枚を投入した。数十枚のメダルが受け皿に注がれ、耳障りな音をたてた。メダルをありつたけ投入してから、レバーを叩いた。三つのリールが回転はじめた。右手の親指が立て続けにキーを叩いた。三つのリールが停止するが早いかレバーを弾き、同じ操作を繰り返す。それら一連の動作は流暢で、恰も手芸のようだつた。

忽ちにして、メダルが底をついた。元春は、軽く毒づいてみせてから、再び紙幣を投入した。閑散とした店内にぽつんと座つた元春の姿は心許なかつた。

一五〇〇〇円ほど投下した頃、やつとボーナスを引き当てた。呑まず喰わずで、閉店まで粘り、一万円をもぎとつた。

屋台で不味いラーメンを搔き込み、繁華街のメインストリートに差し掛かつた。テニスコートが三・四面とれそな広場に面している。広場には若者たちが屯している。通りの反対側は劇場だつた。もう閉まっている。雨露をしのぐことのできる車寄せには、ヒトが集まつてゐる。家なき者たちが余熱の残るコンクリートに雑魚寝している隣で才能の欠片もないストリートミュージシャンが不景気な唄を唱つてゐる。見慣れた景色が元春を不意打ちした。立ち止まつた。痛みはなかつた。だが、些末ではあるが確かに不快感を感じた。広場では軟弱そらうな若者たちがはしゃいでいた。恐らく大学生なのだろう。無神経にも盛り場の危うさに気づくこともできずに呑氣もいいところだ。盛り場の底を這う客引きの連中はタ

フで声を掛けて無視されても諦めはしない。

ふと元春は傍観者として辺りを見回した。見慣れたはずの風景に違和感を覚えた。ネオンサインが闇を侵し、人々に反映していた。撃発する欲望によつて毛穴が塞がるようだ。眼の前に拡がる場に融和するのは容易い。それは多分、心地よいだろうことも判つた。

元春の筋肉が反応した。折れそうになつて元春だが、泥濘を蹴散らして、移動しなければならないことを意識した。唾を吐き、歩行を再開した。足をとられそうになつたが、力不足で前を目指した。

数人がベッドを取り囲み、各自、作業に没頭していた。白のカーテンから陽光が透け、まだ陽が高いことを窺わせる。室内は雑然としていて、アルミケースやスツケースが散乱していた。

ベッドでは、一組のカップルによる性行為

が行われていた。

牝は、レンズへ二人称の視線を向けるようとの指示を与えられていて、それに従つていた。分け入る牡の背後にカメラマンがいて、牡のアップを狙つていた。カメラマンの隣にはブームオペレータがいて、無表情でブームを掲げ、音を拾つていた。ベッドの軋みと肉体の衝突する音がビートで、番う牡と牝の息遣いがメロディだつた。

撮影のために寝室の四隅にACライトが立てられていて室温を押し上げていた。ヴィデオカメラの死角には関係者の面々が並んでいる。ディレクターやマネージャーだった。マイク係の女の佇まいからは感情を読み取ることができなかつた。

牡は昇り詰めようと躍起になり律動を続けていた。律動に乳房が横揺れする。汗が飛び散る。牡はごく自然に鳴き声をあげていたが、実は演技で、絶えずレンズが狙つ

てることを意識していた。媚びを微妙に織り交ぜた眼つきは、前頭葉を刺激し、牡どもを煽り、狂わせた。

人いきれとカップルの分泌物の匂いとが作用して、毛穴を塞ぐように空気が粘ついていた。例の楽器を用いない即興演奏は、殺風景なこの室の状況にあって、居合わせた人々の中枢神経を攪乱し、麻痺させた。

牡と牝は交わりながらも乖離していた。性器を交わしているにも関わらずに、互いの視線は結びつくことがない。撮影スタッフもまたプロらしく被写体に感情移入することはなかつた。

熱の籠もつた行為とは裏腹に、限りなく不毛だつた。

埃っぽい風が断続的に吹きつける。ミホは車道と歩道を隔てる柵に寄り掛かり所在なさそうにしていた。ミホの視界の大半を占めているビルディングは駅ビルだつた。幾つものガラスドアが横に列んでいて、開け放しに

なつてゐるわけではないが通行が途切れることがないために終ぞ閉まることがない。入れ替わり立ち替わり人々が現れては擦れ違い立ち去つてゆく。往々交う人々が描く綾模様は刻々と変態を遂げながらも解体することはなかつた。

そんな塙堀の至近距離にありながらもミホは蚊帳の外だつた。ふと俯くと、地面上には新聞紙の切れ端や煙草の吸い殻や踏み潰されたファーストフード店の紙コップが散らばつっていた。

熱を持ったゼラチン状の飛沫がミホの貌を汚した。カットが掛かるや雑誌のスチールカメラマンがシャッターを切つた。俄に室内が慌ただしくなつた。カメラマンも音声も機材を下ろし、撤収作業に取り掛かっている。ミホは手渡されたティッシュペーパーで貌を拭きスタッフに誘導されて浴室へ入つた。

鏡を直視できない。迸る湯の束で躰を流

しても違和感は澁のようにはミホに居座り続けた。

ミホは依然として街角に佇んでいた。携帯電話を取りだしてみる。だが、誰かがアクセスを試みた形跡は微塵もなかった。落胆を紛らすためか、必要もなく携帯電話を弄つてから、仕舞つた。

複数の潮流がぶつかりあつて渦を巻き起こしている。膨大な数にのぼる個体が殺到する場にあつては個性を考慮することが困難だ。

だが、それらの肉体がそれぞれに価値観や煩惱といった業をその裡に抱え込んでいることは紛れもない事実だつた。

ミホの貌に感情は見当たらなくなつていた。それでもミホはその場を立ち去ることができずについた。

ふと騎士が現れた。それまでミホを無視していた群衆の中から一人の青年が規則を超え、ミホの方へ真っ直ぐに向かってきた。ミホの頬が僅かに緩んだ。彼我の距離が詰まる。ミ

ホはどう対応しようかとどぎまぎした。靴音が聴こえる距離になつた。ミホは思い切つて面を上げた。

青年は、ミホの隣で待つていた恋人と落ち合つた。

落胆がミホの貌を覆つた。

いつか辺りは暗くなりはじめていた。ミホは待ち合わせをしてもらひないのに、待ち人を待ち続けていた。

奈津樹はすり鉢のどん底に佇んでいた。辺りは陽が沈んで久しいという事実が霞むほどに皓々たるものだつた。頭上では三つのディスプレイがそれぞれコンテンツを出力している。轟々たる喧騒や怒濤のようなヒトの集まりが街を席巻し炎上させていた。

信号を待つ奈津樹は、真正面を見据えていた。眼つきは凜然としていた。奈津樹の傍に位置していた二人組はどうやらまだ小

学生らしく、群衆から浮いていた。服装や見様見真似の化粧で歳を誤魔化そうとしていたが見え透いていた。奈津樹は一瞥はしたもののが興味がなさそうに視線を外した。

テレビクルーの一団が二人組の進路を塞いだ。リポーターはタレント代わりに採用されたテレビ局の女性アナウンサーだった。二人組にマイクを向けた。

「どこにいくのかな」

調子外れの猫撫で声だつた。奈津樹は思わず舌打ちした。

バッテリー・ライトを浴び、二人組は舞い上がつていた。

「わかんない」

二人組は貌を見合させて相好を崩した。

「こんな時間に出歩いていて保護者の方に怒られない」

接続に成功するやリポーターは問いかけた。

奈津樹は眉を顰めた。

「うちの親優しいから」

子供らしい浅はかな薄笑いを浮かべた。リポーターはもう一人の少女にマイクを振った。

どうやら先に質問に答えた少女の方が彼女を引っ張っているらしかつた。受動的な少女は言い淀んでから応えた。

「うちは……パパいないしママはミクに興味ないみたい」

リポーターは、ひどく芝居じみた表情を

つくり、何度も頷いてみせた。

やはり奈津樹は不快感を顕わにしていた。

多分、連中は井戸端会議と大差のないくだらない番組のスタッフだ。積極的に彼女たちに関与してゆく覚悟もなしにルーズな描写をしてオンエアに掛けるのだろう。出演者たちは政治的なVTRを見て、凡庸な感想を述べてCMに繋ぐのだろう。

リポーターはミクに続けて問い合わせた。

「寂し……」

火の粉が散った。リポーターが悲鳴を上

げて仰け反った。照明がブレた。リポーター

が面をあげ、奈津樹を見た。

奈津樹が喫いさしの煙草をリポーターに投げつけたのだ。

「どうしました」

リポーターの悲鳴を聴きつけた警邏二人組が近づいてきた。

ちょうど信号が変わった。奈津樹は身を翻し人混みに飛び込んだ。怒濤をフットワーク巧みに奈津樹は駆け抜けていった。

「あんまり

ミホは諦めたように笑った。

「奈津樹は？」

「うーん、ビミョー」

「そつか

「ね、踊らない？」

誘つてみて、ミホが決して踊らぬことを思い出した。

「踊なんいか

奈津樹は戯けて舌を出した。

「踊る」

ミホが起ちあがつた。意外な成り行きにブテンボでリズムを刻むシンセドラムが空間を烈しく搅拌している。ソリッドな獣たちが

一堂に会している。

カウンターの隅にミホがいた。奈津樹が肩

を叩く。不意を衝かれたミホは真顔で振り向き奈津樹をややたじろがせたが奈津樹と認識するや頬を緩ませた。

「チョーシどう？」

ミホに促され、棒立ちになつていた奈津樹は我に帰つた。

ミホのステップは辿々しくシルエットもぎこちなかつた。だが、ミホは幼児のようにはしゃいでいた。頬を上気させて奈津樹に弾んだ表情を見せた。ミホにつられて奈

津樹も陽気になつた。

二人は飽くことなく軀を揺さぶり生命を震わせる遊びに耽つた。

強化ガラスのちいさな窓口を介して、景品と現金が交換された。現金を受け取つたのは、元春だつた。煙草に火を点けて歩きはじめた。今日もひねもすスロットだつた。收支はちよつとした料理をペアで食べることのできるくらいのものだつた。

しきりに目頭を揉んでいる。終日、リール

を眺めていたのだから不思議ではない。無性に焼き鳥が食べたかつた。砂肝と豚バラをどつさり頼んで、勝利の美酒に酔うこと想像すると自ずと貌が綻んだ。

表通りから細い路地へ折れる。ざっかけない呑み屋が所狭しと軒を連ねる横丁は、見ると不衛生そうだが、賑やかだつた。通路は狭く、舗装の損傷は激しい。店の連中は、

径往く人々に見境なく誘つてゐる。イントネーションのぎこちない日本語が飛び交う。眼を凝らすと同じモンゴロイドだが日本人ではない店員が少くない。煮込み・おでん・焼肉と、店毎に出している肴が違う。やつと、焼き鳥を出している店に差し掛かつた。元春は、暖簾を潜つた。

フイリピン人のようにも韓国人のようにもみえるママの「いらっしゃい」もやはり片言だつた。ビールと焼き鳥を頼んで、次の煙草に火を点けた。

たまにはこんな場末の呑み屋も悪くなかつた。おそらく気取つた人種は一生足を踏み入れることもないだろう。だが、スカラシたショットバーなんかよりは居心地はマシだつた。

店の一角落に、東南アジアに属する国から出稼ぎにきているものとおもわれる女の子と韓国人あるいは中国人らしき男のカップルが座つていた。二人の身なりはお世辞に

も小綺麗ではなかった。生業もおおよそ見当はついた。

二人の共通言語は不自由な日本語らしく言葉數は少なかつた。だが、二人とも充ち足りた貌で大して美味くもないだろう焼き鳥を頬張つては、視線を交わす。それはとてもあたたかだつた。

元春は、苦笑を浮かべ、負けじと豚バラに囁りつき、ジョッキを呷つた。

深酒は控え、微酔いで横丁をあとにした。久々に気分はよかつた。とりたてて理由はないが、晴れやかだつた。

表通りに戻り、暫く歩いた頃だつた。

寄り集まつた幾つかのヒトの影絵が、人通りの彼方に見えた。距離を縮めると、怒号を聴きとることができた。俄に元春の貌が引き締まつた。

道路標識を取り囲む男が三人と、道路標識にしがみつく男が一人だつた。孤立無援の男は、四十前後で安っぽい背広から察するに会

社勤めをしているふうだつた。三人組はいずれも二十歳になるかならないくらいだつた。スパイクヘアと金髪の坊主とニット帽が、しがない中年に攻撃を浴びせていた。その集団に近づくにつれ、元春の歩調は鈍つていつた。巻き込まれるのではないかという懸念はなかつた。巻き込まれても、ヤクザになる覚悟もない若造など恐れるに足らなかつた。元春が気を取られていたのは、ここが衆人環視の状況だということだ。人通りは少なくない。三・四人連れもちらほらいる。だが、彼らは事も無げに素通りしてゆく。教室で見掛けたことのある光景だつた。通行人たちの行動パターンは一様だつた。まず、人影の塊に気づく。ややあつて、暴力が行使されているのに気づく。それに気づくが早いか眼を逸らして通り過ぎる。どうやら、都合の悪いものは識別しない受容体をお持ちのようだ。口々に彼らは云うだろう。不注意な被害者が悪いのだ、

と。

くずおれかけた中年は、胸ぐらを掴まれ、力ずくで垂直に引き上げられ、鳩尾の辺りを膝で蹴られた。中年の口から唾液が迸った。スパイクヘアが手を離すと中年は地べたに這い蹲つた。

通りすがりのカツプルは、会話を中断することなく素知らぬ貌で私刑の行われている傍を通り過ぎた。しらばっくれる通行人を見送つて視線を前方に戻した元春は、心底 辟易した貌になつていた。

金属が鳴つた。中年の顔面を狙つた蹴りが標識を掲げる金属柱に逸れた。

なに避けてんだ、コラ

蹴りを外した金髪の坊主が声を荒らげた。

金髪が履いているのはスニーカーではなくブーツだった。元春はそれに気づき、舌打ちをした。呆れたように頭を振りながら集団に近づいた。

金髪坊主が再び片脚を撓らせた。元春は壁

バスを出すような動きで金髪坊主の躰を支えている方の脚を払つた。

軽々と金髪はよろけた。スパイクヘアもニット帽も元春に気づいた。

「なんだよ」

威嚇しているつもりなのだろうが、あどけなさを残す貌で凄まれても何の感情も湧かない。

「もういいだろ。そのくらいで勘弁してやれよ」

起きあがった金髪坊主は元春に突っ掛かってきた。煩そうに元春は裏拳で金髪坊主を突き放した。

「テメーに関係ねえだろっ」

スパイクヘアのボーアイズソープランノは虚勢そのものだった。

「あん？」

穏やかだつた元春の形相が一変した。スパイクヘアとニット帽はそれをまともに目撃し、射竦められてしまつた。三人がかり

でも元春が手強いことを悟つた。鼻血に愕いていた金髪坊主だけが蚊帳の外だつた。果敢にも、再アタックしようとした。バイクへ

アとニット帽は慌てて制止した。

三人組は、ぐずぐずと立ち去つた。立ち去り際に、元春に敵意を込めた一瞥をくれたが、元春は動じなかつた。

「オッサン大丈夫か」

中年は、アルコールのせいで痛みさえ感じていないうで、ぶつぶつ諧言を云つている。「格好つけてんじやねーよ、どうせブーダ

ろ」

三人組だつた。追いつけない程度に離れていた。元春がスタートを切るポーズをすると、一眼散に逃げ出した。

いつか元春と中年の周りに通行人たちが集まつていた。誰が音頭をとるわけでもなく拍手が湧き起こつた。中年を助け起こそうとしていた元春だが、やめた。観客に成り済まし

た連中を蔑みの視線で見回してから、人垣に割つて入つた。

ミホの眼つきは、やはり、投げ遣りだつた。がらんとした室の明かりは点いておらず砂嵐のテレビだけが光を放つていた。ミホは、壁際に座り込み、のろのろとした手つきで何やら作業に取り組んでいた。ミホの周りは小物類で散らかっていた。ティースpoonを宙で静止させ、徐にライターを擦つた。

刹那だけ闇が炎上した。スプーンは透明な液体を湛えていた。スプーンがささやかな焰にくべられる。忽ちにして、液体は沸点を迎えた。水の弾ける音がやけに反響した。

焰も蒸発音も費え、再び、闇と静寂の帳が降ろされた。

腕に針を立て、息を呑んだ。刺して直ぐ

にポンプを微かに引くと円筒の内側でうつすらと血煙が舞つた。呼吸を整えてから、ポン

プを圧した。円筒に絡みついた指は細長く病的だつた。血流に異物が混入してゆく感覚に躰が自ずと弓なりに反る。

無造作に注射器を床に棄てた。注射器は虚ろな音を立てた。

ミホは虚脱して壁に凭れた。四肢はだらしなく弛緩していた。双眸は見開かれていたが陶然とした眼つきが受容体として機能していないことを物語っていた。だが、意識が混濁していなきことも眼つきから読み取れた。表情は、病的なまでに吹つ切れたそれだつた。薬理作用が過ぎ去るまでの間、ミホはずつと塑像と化していた。遊離を終えて、ミホは戻ってきた。やつと身じろぎはしたが、表情は変わらなかつた。暫し、ミホは放心していだ。ふと、心なしかミホの眼が翳つたようにみえた。ミホはそつと闇へ手を伸ばした。とわりつく闇からミホが取りだしたのは、スマ

テンレス・シルバー仕様のリボルバーだつた。

すつと銃口をこめかみに照準した。さつきから殆ど瞬きをしていなかつた。ミホは勿体つけはしなかつた。

轟々たる騒音が殺到するすり鉢の底は、今夜も混沌としていた。

奈津樹は赤信号に足止めされた。

いつもは無視する頭上のディスプレイをふと仰ぎ見た。そこに、人気AV女優の変死のニュースが待ち構えていた。奈津樹がこの街で逢うときは見違えるほど、入念なメイクを施した顔写真が大写しになつていた。

奈津樹は思わずサングラスを外しディスプレイを見直した。だが、事実は覆らなかつた。俄に汗が引いた。

信号が変わつても、奈津樹は歩き出せずにいた。

白昼だというのに元春は千鳥足だった。したかに酔っていることが傍目にも判つた。戦前から健在の低層建築が軒を連ねる呑み屋街に迷い込んでいた。舞台装置と時間帯とが相俟つて、辺りは廃墟そのものだつた。

躰の裡でアルコールが猛威を振るつてゐるらしく元春はきつそうだ。云うことを聽かぬ躰を引きずるようにして歩き、あてどなく前進を続けている。

ミホにまつわる記憶が、次々と甦り、思考を搔き乱した。憤怒が、元春を苛んでいた。その憤怒が、極端な決断を下したミホに対するものなのか、ミホの下した決断に対するもののかは元春にも判らなかつた。ミホが死んだ。動機は定かでない。だが、もう二度とミホと呑めないことは確かだ。

通りすがりに型の旧い自動販売機が佇んでいた。不運にも、元春の瘤に障つた。元春は拳を叩き込んだ。二度、三度と連ねた。

次いで、蹴りを入れた。虚ろな音を立てて、自販機が揺らぐ。元春は咆吼をあげて渾身の蹴りを放つた。目論み通りに自動販売機を倒したもの、自らも体勢を崩し転倒した。アスファルトは背中を焦がさんばかりによく灼けていたが、元春は起きあがらなかつた。這い蹲り、呻いていると、埃の匂いがした。俄雨だつた。忽ちにして、降り敷かれてゆく。

それでも元春は起ちあがらないで土砂降りの中をのたうち回り続けた。あるいは元春は哭いていたのかもしぬなかつた。

元春の足は自ずとクラブに向いていた。カウンターで待つていれば、ミホが現れるような気がしてならなかつた。例によつて、フロアの喧騒に背を向けて、黙々とグラス

を飲み干していった。

ミホの指定席には、フォールン・エンジエルが用意されている。元春が頼んだ。酔いに据わった眼つきで、元春は在りし日のミホの姿を凝視していた。

すっと、フォールン・エンジエルの脇に、封を切つていなない煙草の箱が置かれた。元春がのろのろと視線を上げた。奈津樹だった。

「踊ろう」

奈津樹は、精一杯に、笑顔をつくつてみせた。これが、元春と奈津樹の初対面の機会だった。

黎明の都市を幾つもの斜光が照射している。色々のないビルディングの群れと眩いプリズムの拮抗は硬く、観る者に緊張を強いる。元春と奈津樹は非常階段で朝を迎えた。二人の足許は吸い殻や空き缶・空き瓶で散らかっていた。二人は、都市が稼動を始める様を目の当たりにして、言葉を喪っていた。

すっと、奈津樹が起ちあがつた。バルコニーから半ば身を乗り出した。

ミホのバカ。

奈津樹の絶叫が閑散とした都市に衝した。元春は愕いて奈津樹を見た。奈津樹は暫し不可視の地平線を眺めていたが、やがて手摺りから離れた。

「ね

元春は面を上げた。

「ぶつとばさない？」

元春は訝しそうに奈津樹の貌を凝視した。すぐには真意を読みとれなかつた。奈津樹の表情は至つて真摯なそれだつた。徐々に奈津樹の意志が、具体となり、迫つてきた。元春は、一旦、眼を伏せた。奈津樹の眼つきが搖らぎそうになつた。元春が視線を戻した。

「やるか

苛烈な陽射しに二人は茹だっていた。二人はオープンカフェのテラスで互いにそっぽを向いて座っている。灰皿は吸い殻で埋まっている。平日の昼間だというのに、二つのグラスにはそれぞれビールとスパークリングワインが注がれていた。

灼けた空気が焦臭い。元春も奈津樹も息を呑み、虚空を凝視している。一切合切を焼き減ぼそういう意志を持つていてるかのような陽光によつて、眼に映るもの全てが刺すような輝きを放ち、眼を射た。

何もしていなくて汗が滲みだしてくる。元春も奈津樹も時折思ひだしたようにアルコールを嘸下し何とか持ちこたえていたが、形勢は不利だった。ミホがカートと名付けた奈津樹の左肩のタトゥーも汗によつて艶やかな光沢を帶びている。

元春と奈津樹の眼の前を老若男女が忙しく往々交っている。ゼロのアタッシュケースを手に提げた如何にも頭の切れそうな男は涼し

げな貌をしていた。ネクタイを弛めた男の勤める会社は中小企業とおもわれた。汗だくになりハンカチで額を拭いながら携帯電話で通話している。不文律に則つたりクリートファッションに身を包んだ女子大生は未だに内定を貰えていないらしい。軽薄そうな高校生の集団は思い上がりた貌つきを羞じらいもなく晒している。薄着の学生ともフリーターともつかない少女たちは同じ銘柄のバッグのストラップを肘の内側に引っ掛けている。

怒濤は弛むことがなかつた。長いこと、元春も奈津樹も見るともなく見ていた。血を沸かせ肉を踊らせる陽射しに焚きつけられ、元春は不意に貌をくしやすくしゃにして頭を搔き毬つた。

「暇すぎて死ぬ」

奈津樹は煩そうに横目で元春を一瞥した。

「何を」

「面白いことに決まつてんだろう」

奈津樹は、グラスを持ち上げ、通りに視線を戻した。

元春は思考に没頭しはじめた。その横顔は、保護色に紛れた獲物を探す肉食獣のそれだった。

床にジグソー・パズルがばらまかれた。

耳障りなサイレンを鳴らしながら二台のパトカーが高速でセンター・ライン上を駆け抜けゆく。目玉焼きが灼けそうなアスファルトから立ち上った陽炎が揺れている。

元春はピースを組合せることに躍起になっていた。

無数の靴音や会話が交響曲を奏でていた。エンジンの唸りが緊張を強いる。飛び交うクラクションが神経に障る。音圧のうねりがコンクリートを大きく揺さぶっていた。元春は幾度となく挫けそうになつた。だが、元春はそれを振り払つた。

やがて、雜踏の交響曲が遠離り、聴こえな

くなつた。

元春は面をあげた。

「ビルはもういい」

「え？」

独り言のような元春の言葉に奈津樹は反応した。

「スカツとしてえ」

自らの気持を確かめるために言葉にしてみた。

「もうバー・ボンも泡盛も飽きた」

奈津樹は元春の云わんとするところを理解した。

「じゃ、こいつは？」

奈津樹は自分のシャンパン・グラスに注がれたスペーカーリング・ワインを頸を尺つて指示した。

元春は聴き流そうとした。聴き流そうとして、表情を一変させた。

「そうだ……スペーカーリング・スピリッツ……スペーカーリング・スピリッツだ」

元春と奈津樹は俄には信じ難い朗報を受けたかのように、恐る恐る貌を見合せた。そして、破顔した。

ややあつて、元春は訝しげな表情になり、腕組みをした。

「……って何だ？」

「考えなしかいっ」

奈津樹は呆れてそっぽを向いた。しつくりしない沈黙が二人の間に割つて入つた。元春も奈津樹もそれぞれに思案を巡らせた。

やがて、奈津樹が口を開いた。

「ギヤングやんない？」

腕組みしたまま硬直していた元春がのろのろと奈津樹を見た。

「カツアゲとかコンビニ襲うとかじやねえよ

な

「それじや、ビル以下じやん

奈津樹の口許には不敵な笑みが浮かんでいた。真顔だった元春だが、それを見て取り、

奈津樹に倣つて貌を綻ばせた。

「問題はどこを狙うか、だね」

二人は思考を再開した。

やはり、二人の眼の前を無害な草食動物

の群れが入り乱れていたが、捕食者が奸計を巡らせていることなど彼らには識る由もなかつた。群れを搔き分けて、女の二人組が元春たちのいるオープンカフェに向かつてきた。彼女たちは草食動物ではなかつた。

二人組は自意識過剰な服装からして水商売に従事していることが一目で判つた。二人組は元春らの席の傍を通る進路をとつた。元春は思わず二人組の二対の脚の運動を盗み見した。二人組が店内に消えるが早いか元春の表情筋がびくりと動いた。

「当てがあつたぞ」

「銀行だつたらキレるよ」

奈津樹は厳しい視線を投げかけた。

「外れ」

元春は勿体つけた。

しつとりと潤つた背中は、絹のように光沢を帯びていた。女がダブルベッドに俯せになつている。ヴォリュームのある髪が項を覆つていて。髪はウェイヴがかかっており雅やかだ。女は暖かみのあるヴァイオリンの奏でる旋律に聴き入るかのように瞼を閉じてリラクゼーションに浸つていた。

女の足許に、男が跪いていた。男は黒のビキニだけを身に着けていた。歳の頃は、二十歳前後にみえる。肌は張りがあり、眼は澄んでいた。まだ肉体が潔癖であろうと藻搔いていた。

青年は頻りに身じろぎしていた。眼を転ずると青年の掌が俯せになつた女の脇ら脛を揉んでいた。

「もつと強く

「はい」

青年の声はうわずつていた。慌てて、注文に応じた。

女が短い悲鳴をあげた。青年はびくりとした。嵩んでいた無数のしなやかな曲線が分散し、充分な殺傷能力を秘めた切つ先のような視線が衝きだした。

「何やつてんのよ」

女は青年を蹴飛ばし、徐にベッドを降りた。仁王立ちになつた女は長身だつた。一八〇はあるうかという背丈だ。尻餅をついたまま、青年は平謝りした。だが、女は腕組みをしてそっぽを向いたままだつた。青年は怯懦に躰を震わせてる。女の口許に嗜虐的な笑みが頭を擡げた。

「私の爪先をお舐め」

床にひれ伏していた青年は、女の第一声に面をあげた。訝しげな表情だ。

女は茫然としている青年に毅然と云い放つた。

「犬みたいに四つん這いになつて私の爪先を舐めるのよ」

青年は躊躇つた。だが、女の態度には有

無を云わせぬ凄味があつた。

床に、蹲る影とそれを見下ろす起伏に富んだ影が伸びていた。間もなく、蹲っていた影が起伏に富んだ影の足許に接近を遂げた。女は綾香といつた。

そこを獵場とする女たちと同様に、その街も夜だけ着飾り、化粧を施していた。繁茂したネオンが夜の闇を中和している。オフィス街とは昼夜がひっくり返った土地にあっては、夜の方がかえつて活気があつた。

街角を、髪を引つ詰めて蔓の太いサングラスを掛けた綾香が肩で風を切つて歩いている。

胸元や背中が露わになるドレスを見事に着こなしている。綾香は通りに面したビルディングのエントランスに入つていった。

綾香が現れるや、店じゅうの人間が一斉に視線を注いだ。数多の視線に對して婉然たる微笑を振り蒔きながら奥へ歩を進める。女帝の風格を漂わせていた。従業員は綾香が近づ

いてくると立ち止まり深々と頭を下げて綾香が行き過ぎるのを待つた。綾香の行く手に、また一人、ボーイがいた。ボーイは慣習に則つた。そのボーイは、件の尊厳を奪われた青年だつた。

広い窓からはスマッシュに煙る過密都市を見渡すことができた。どこからか、何やら物音がしている。五代の室と較べても決して引けをとらないくらい、広い室だつた。物音に耳を澄ます。金属同士が触れあう音や擦れる音だつた。

テーブルを囲んでいるのは三人の外国人で、一人は白人の女だつた。二人の男は、白人と黒人が一人ずつだつた。彼らは黙々と手作業に取り組んでいた。テーブルには金属片やスプリングが散らばつており、数本のスプレー缶が並んでいる。卓上が片付く頃、三人とも組み立て終わつた拳銃を手

にしていた。

「ボロいツアードったな」

咥え煙草の白人の男・ミルズは、誰にともなく、述懐した。

「おまけにレストランでも水は只だしね」  
髪をきつくアップにした女は片頬笑みを浮かべた。

もう一人の巨体の持ち主である黒人・ウイールは、片手だけでスライドを操作し感触を確かめている。

「あと一週間か。ジャパニーズガールも悪くはないがやつぱり俺は白人の方がいい」

ケイトは聞き流した。ミルズは、苦笑混じりにかぶりを振つてから、話題を変えた。

「明後日がギンザで、ファイナルは民家だったな。計画は万端か」

「云うに及ばず。本当に日本はジパンングよ」  
ケイトは不敵な笑みを湛え、九ミリバラベラム弾を抓み、弾頭を見据えた。

目指すは廊下の突き当たりの室だつた。

ボステイング業者に扮して、手前の扉から順にドアポストへダミーのビラを配つてゆく。努めて監視カメラを見ないようにして、一軒ずつ前進した。

残るは突き当たりの扉のみとなつた。不審がられぬようにつつと監視カメラにフレーミングされているとおもわれる空間を通過した。死角に潜り込むや慌ただしい手つきでトートバッグからスタンガンを取りだした。元春の長身ならば問題なかつた。監視カメラのケーブルの根元を狙つてスイッチを入れた。ラバーの灼ける匂いとともに、断線したケーブルがだらりと垂れ下がつた。

元春は階段の方を振り返つた。角から廊下を覗く者がいた。元春は黙つて手招きをした。小柄だが侮れないことを悟らせるその男は靴音を立てぬように注意を払いながら

ら元春の傍に駆け寄つた。元春と同様にキヤップを目深に被つてゐる。チャンが近づいてくると元春は場所を譲つた。チャンは扉の前に跪き二・三本の細長い金属の棒をベルトに噛ませたレザーリングのポーチから抜き取り鍵穴に差し込んだ。

元春は頻りに階段口を気にしている。チャンの横顔もまた強張つてゐる。金属の擦れる音がノルアドレナリン分泌の触媒のように作用する。

小気味のよい金属音が抜けた。

元春とチャンは視線を交わした。次いで、アーム・レスリング型の握手を交わした。チャンは踵を返し、階段へ引き返していった。チャンを見送ると、元春は唾を呑み込みドアノブに手を掛け手前に引いた。

オープンカフェで気炎をあげたあの日の、元春と奈津樹の会話には続きがあつた。奈津樹が企画を持ち掛け、元春が標的に心当たり

があることを暗示した。そして、奈津樹が口を開いた。

「道具は何とかなるかも」

「マジで？」

半信半疑の元春に奈津樹は莊厳に頷いてみせた。

時を経て、いよいよ決行の運びとなつた。奈津樹が或るマンションへと元春を連れてきた。新宿で以前は屋台を引いていたチャンもピッキング要員として混じつていた。「二階の奥の室だから」

何故か奈津樹の表情が硬かつた。

元春はまだ詳しいことは聴いていなかつた。

「それでここって何なんだよ？」

「深作一家の武器庫」

奈津樹は元春を見ずに云つた。深作一家とは、指定暴力団の系列であり、系列であらながらも都内では名の通つた組だつた。元春はいまにも泣きだしそうな表情を浮

かべ奈津樹の横顔を窺つたが、奈津樹はとりつくしまがなかつた。

バッグから手探りでとりだしたマグライトを点け、三和土から上がつた。ダイニングキッチンへ伸びた廊下の途中にそれぞれ手洗いと浴室と思しき扉が在つた。無視して、ダイニングキッチンを目指した。マグライトの丸い光芒だけが視野だつた。

マグライトを水平に向け、元春は立ち止まつた。何らかの直方体の群れがダイニングキッチンの全貌を遮蔽していた。直方体とは、積み上げられたコンテナや木箱だつた。何れも丈が天井すれすれまであつた。獸道さながらの通路が確保されているのに気づき、元春は取り敢えず奥までいってみると、室は2LDKだつた。床が抜けたほどに荷物の詰め込まれたダイニングキッチン同様にあの二部屋にもコンテナ類が山積みになつていた。

探索を終え、元春はすこしだけ思案を巡らせてから、作業に取り掛かろうとした。元春は携帯電話のバイブルーションに引き止められた。

「いまのとこ、異状なし」

奈津樹からの報せだつた。

「了解」

元春は折り畳んでいたドラムバッグを取りだした。そして、手近なコンテナを床に降ろそうとした。かなりの重量があり、結構な運動だつた。

マグライトを向けて、元春は唸つた。緩衝材が敷き詰められていて、幾つものグリップが覗いていた。そろりそろりと手を伸ばしてみた。緩衝材から引き抜いたオートマティックの拳銃はダンベルのように重みがあつた。しげしげと眺めた。

ふと我に帰つた。手にしていた拳銃をドラムバッグに仕舞つた。落ち着きを失くした手つきだつた。あとは無我夢中で、片づいた。

端からドラムバッグに放り込んでいった。暗がりに拳銃の折り重なる物音だけが聴こえていた。

殺風景な室に複数のテレビモニターが乱雑に列べられている。いずれも映像はモノクロ

で、固定カメラから送信されていて、一定の地点を斜め上からの俯瞰で捉えていた。どのモニターの映像も何の変哲もない景色ばかりだった。

東尾と本木が昔ながらのグレイの装丁の施された回転椅子に座っていた。

東尾は四十前後にみえた。貌はちいさいが上背はある。躰は引き締まっている。パーツの一つ一つが粗削りで野趣溢れる貌だちをしている。

本木は元春と同じくらいの年頃だ。東尾とは対照的に端正な貌だちをしている。彫りが深く陰翳に富んでいる。肩まで髪を伸ばしている。

東尾はモニタリングを本木任せにして、湯呑みで焼酎を煽り、もぐりの業者から没収した裏ビデオを鑑賞していた。一方の本木はモニターに向き合つてはいたが、頻りに携帯電話を操作し、モニタリングは疎かになっていた。

視界の端の異変に気付き、本木は携帯電話からモニターへ眼を転じた。一台のモニターの映像はマンションの外廊下の模様を出力しており、手前から奥に向かつて左手にドアが列んでいる。画面の奥に、人影があつた。本木は注視した。青年は大きめのトートバッグを手に提げていて、手前に進んだ。ドアの前を通り掛かる度にドアポストにトートバッグから引き抜いたビラを投函してゆく。本木は息を吐き、再び、携帯電話に視線を戻した。その隙に、青年の姿を出力していたモニターが暗転した。

「あれ？」

携帯電話から眼を離した本木が呟いた。

東尾ははしたガネで何でもやる女の痴態に気をとられたままだった。先ず本木はモニターの電源スイッチを繰り返し操作してみたが、電源ではなさそうだった。

「アニキ」

反応はなかつた。東尾は食い入るように性交を見つめていて、比喩ではなく、垂涎しかけていた。仕方がなく、本木は席を離れ、東尾に接近した。だが、距離が近過ぎた。

「アニキ」

意表を衝かれた東尾は叫き声を残し椅子から転げ落ちた。

「下剋上か、コノヤロー」

身構えようとする東尾を本木がどうにか宥

め、やっと本題に入ることができた。

「どうもカメラがイカレちやつたみたいなんっすけど」

「結線は？」

「他の端子突っ込んだら映りますから」

東尾は舌打ちをした。

「ビデオねえと監査うるせーからな」  
東尾は続けた。

「ちょっと出掛けるか」

ドラムバッグのジッパーを閉め、床に降ろしたコンテナを元に戻すと、元春は携帯電話をとりだした。

「引き上げるけど、表、だいじょうぶか」

「戦果は」

「ノープロブレム」

「弾丸は？」

元春は絶句した。

「……入ってんじやねえの」

「な、わけないでしょ」

奈津樹は苦虫を噛み潰したような表情に

なった。辛うじて、二の句を継いだ。

「どつかにあるはずだから捜して」

「待てよ」

云わせも果てずに、通話は奈津樹から打ち切られた。

元春は不承不承 弾丸を捜しはじめた。

数多のコンテナの中から弾丸を捜す作業は予想通りに困難だった。何せコンテナの一つ一つに十挺前後のダンベルが収められているのだ。元春は額に汗して積み上げられたコンテナの上げ下ろしをした。

元春はふと時計を見た。舌打ちをした。そろそろ制限時間だった。後始末を考慮すれば、検めることのできるのはあと一つか二つだった。憮然としながらも、次のコンテナを床に降ろした。

元春は刮目した。グリップの羅列ではなく、発泡スチロールの一枚板だった。期待しないようにしながら手を伸ばした。スポンジの上に一円玉より一回り大きい鉗のようなものがびっしりと列べられていた。スロットで外したときと同じように元春は貌を背けた。腹立ち紛れにちいさな鉗を拾おうとした。元春は歎声をあげた。びっしりと並んでいたのは

鉗ではなく、薬莢の底面だった。元春はたこ焼き職人さながらの手つきで次々と弾丸を拾い上げていった。

マンションの前にプレジデントが停まつた。物陰から見張っていた奈津樹は俄に緊張した。プレジデントから降りてきた二人組は、見るからにまつとうな職に就いていた。なさそうだった。奈津樹は慌てて握り締めていた携帯電話を操作した。

携帯電話が振動していた。取り込み中の元春は無視していた。だが、振動は收まらなかつた。根負けして、電話に出た。  
逃げて

切迫した声の様子に元春は弾かれ、既に手についていた一掴みをドラムバッグに流し込み、  
起ちあがろうとした。

靴音を聴いた。一対ではなかつた。元春は辺りを見回した。隠れる場所はなかつた。

話し声が聴こえてきた。音源が扉の前だと判つた。元春が逃げあぐねてゐるうちに、闇が割れた。

本木は俄に色めいた。

元春は反射的に玄関と反対の方向を目指した。

リビングに隣接した室に移動したもの、逃げ道はなかつた。室の奥に、カーテンに隠された大きな窓があるだけだつた。振り返ると、二人組が肉薄してきていた。元春は窓に向かつて駆けだした。

真夏の夜の宙に、ドラムバッグを抱えた元春が舞つた。ガラスの破片が飛び散り、アスファルトに降り注いだ。案の定、着地に失敗した。無様に地べたに転がつた。

二人組が枠だけになつた窓から身を乗り出した。

「待てコラ」

元春は擦り傷だらけになりながらも起ちあ

がりアスファルトをカタパルト代わりに蹴つて駆けだした。

物陰から動静を傍観していた奈津樹も立ち去ることにした。

窓から身を乗り出して、階下の様子を窺つたのは東尾だつた。一面に降り敷かれたガラスの粉が閃きを放つていた。蹲つていた賊は、体勢を崩しながらもスタートを切つた。

待つ筈がなかつた。東尾は本木をみつけた。

「おめえ飛び降りろ若けえんだし」「無理っすよ」

本木は身振り手振りを交えて拒否した。東尾と本木は正規ルートを辿ろうと玄関を目指した。つと東尾が立ち止まつた。本木もそれに倣う。本木は怪訝そうに東尾の横顔を窺つた。東尾が渋面をつくつていた。

「多分アイツには追いつけない。近隣住民がチクる……」

事実、その頃、物音に気付いた通行人や近隣住民がわらわらと主役の去つたステージに集まりはじめていた。

東尾の詠んだ句の続きを本木が引き継いで言葉を発した。

「ここには大量のチャカ……。俺らはパクられ、組は壊滅状態……」

二人は怖ず怖ずと貌を見合させた。それから、駆けだした。

ボストンバッグを引っ提げた元春が急ぎ足でラブホテル街を歩いている。その歩調は憤然としていて街娼も商談を持ち掛けることを躊躇うほどだった。やがて、元春は一軒のホテルのエントランスを潜つた。

入室し、待つっていた奈津樹をみつけるや、緊張の糸が切れた。

「ちゃんと見張つてろよ」

元春が口角泡を飛ばす。身振り手振りを加え、奈津樹に食つてかかっている。奈津樹は元春がクールダウンするのを待つことにした。

「ヤバかつたじやねえか」

奈津樹は構わず腕組みして煙草を吸い続いている。

「聴いてんのか」「聴いてるよ」

奈津樹がきつい口調で云い返した。気圧されたものの、元春は諦めなかつた。

「何だよ」

「そつちこそ何だよ」「睨みあう。

「三〇分は堅いっつってたじやねえかよ」「あくまで予想じやん。天氣予報だつて外れんだよ」

尚も睨みあいは続いたが、やがて、同時にそっぽを向いた。

頃合いを見計らつて、奈津樹が口を開い

た。

### 「ピストル見よう」

奈津樹の絶妙の云い方に元春は見事に毒気を抜かれた。元春は、こいつは敵に回したことなくないと云わんばかりの表情を覗かせた。

床に、幾つかの種類のオートマティック七挺が列べられた。弾丸は直径の異なる二種類のパッケージが七箱だった。

壮観に見取れていた二人だが、ふと貌を見合させた。そして、不敵な笑み混じりの目配せを交わした。

となりが纏められ、識者とやらが云いたいことを述べていた。

元春が憤然とスポーツ新聞を地に叩きつけた。

### 「だから、死んじやいけないんだよ」

奈津樹だった。興奮に水をさされた元春が奈津樹を見る。奈津樹が言葉を継ぐ。

「死人に口なしつてね。生きてさえいれば、ムカつくヤツがいたらぶつ飛ばすことだってできるのにね」

云い終わって、奈津樹は唇を噛んだ。元春は、渋々、矛を収めた。

週刊誌やスポーツ新聞や三面記事に載るような事件を根掘り葉掘り取り扱うテレビ番組

が、人気AV女優の自殺というスキヤンダラ

スな事件を放つておくはずがなかつた。ミホは、死して尚、貶められ、辱められていた。

「薬物を使用していて、拳銃を不法所持していたAV女優」という字面だけで、ミホの人

拠点にしたラブホテルの一室に元春と奈津樹はいた。

### 「クルマは？」

奈津樹に訊かれ、元春は額髪を撫でながら答えを導きだした。

「要るよな、やっぱ。その辺でパクリやいさ」

元春は言を継いだ。

「あと、やっぱ二人じやムリだよな」「多分ね」

奈津樹は僅かに頷いた。揃つて心当たりを探り出そうとして、奈津樹が水をさした。

「主体性のないヤツはナシだから」

奈津樹の峻険な表情に元春は気後れしつつも、詮索は控えた。いつか奈津樹の眼に元春の姿が映つていなかつた。

中学生の頃だつた。夜遊びをしているところを補導された。夜遊びといつても、ただ夜の街を徘徊していただけだ。だが、殊に叱られた。補導された際、同級生と一緒にやくりながらこう釈明した。

「ユウは恐かったのにナツちゃんが誘うからイヤつて云えなかつた」

奈津樹は反駁しなかつた。愕きの余りに言葉を組み立てられなかつた。ご丁寧にも親にも報せがあつた。奈津樹の

両親は離婚しており、同居していたのは父だけだつた。有能だが情勢欠如の奈津樹の父は、鬱陶しそうに奈津樹を一瞥しただけだつた。

ユウとはそれきりとなつた。

「おい」

元春は奈津樹の貌のすぐ傍で掌を振つた。我に帰つた奈津樹が元春を見た。

「どうした？ひよつとして生理でもきたか？」

奈津樹の爪先が元春の脛を蹴りつけた。

五代は、麻布の超高級マンションで暮らしていた。投資家を名乗つていたが、事実上は詐欺師だつた。計画倒産でも鉄砲でも手段を選ばずに、富を搔き集めてきた。金融業界では悪名高かつた。

あぶく錢に塗れ、夜な夜な、贅沢な料理を平らげ、六本木のクラブに顔を出すとい

う放蕩ぶりだつた。麻布のマンションは、独りで棲むには広すぎた。家賃は数十万円にも及ぶ額だ。

五代も、いつまでも悪運が続くとはおもつていなかつた。このところ、違和感があつた。失敗が相次いだ。そろそろ潮時なのかもしれない。近頃、鴉どもが五代を遠巻きに取り囲んでいた。海千山千の果てに変貌を遂げた鴉どもが手ぐすねを引いて五代の失脚を心待ちにしていた。

国内有数の白鳥グループが潰れ、塩漬けにしていた五千万円相当の株が一夜にして紙屑となつた。その夜は珍しく泥酔した。呼びつけた娼婦にナルファックを強要し、慰謝料を取られた。

この稼業から足を洗う記念に、もう一山当ててやろう。

五代は、脚を縛らせながら、居間に到つた。居間に陳列された貴金属類は、リスクヘッジの一環だつた。セキュリティの厳重な

マンションだつたこともあり、五代は盜難のリスクを考えていなかつた。窮地に陥り、貴金属を換金して元手にすることにした。

久々に、蒐集した貴金属の陳列を一覧した。最も廉いものでも市価は数百万円だ。しげしげと陳列を眺めていた五代は、ふと、訝しげな表情を覗かせた。改めて、陳列を見直す。俄に五代の表情が曇つた。

五代の絶叫が、リビングを震わせた。

一枚でも二人じや食べきれないサイズのピザにも関わらずに二枚も注文した。あまつさえフライドチキンやハッシュドポテトものべつまくなしに頼んだしワインのフルボトルとビールのピッチャーも調達してきた。グラスの準備を億劫がつて、回し呑みをはじめた。

ピザの表面に赤みが掛かっていた。尋常でない分量のタバスコが降り掛かっている

せいだった。元春と奈津樹が摂食する様は、野生児の二人らしさに充ち溢れていた。二人とも無言で次から次に切れ端を喰いちぎり咀嚼もそこそこに呑み込んでゆく。折に触れて、フルボトルかピツチャードを煽る。多少、口許から垂れても気にしない。フライドチキンやハツシユドポテトもピザを食する合間にしつかりと摘んでいた。

元春と奈津樹が揃って煙草に火を点け一口目の煙を吐き出したとき、ピザは一片しか残っていなかつた。ピザの乗っていた紙箱のうちの一つは空になつていた。

セックスの直後と相似の感覚が二人を包み込んでいた。アルコールも漸く全身に作用はじめた。それぞれ、二・三本煙草を喫い尽した。そして、微睡みかねない心地よい弛緩が訪れた。互いに煙草で荒れた喉をアルコールで潤しながら自ずととりとめのない話になつた。

「な、奈津樹はこれまで何してたんだ？」

せいだった。元春と奈津樹が摂食する様は、野生児の二人らしさに充ち溢れていた。二人とも無言で次から次に切れ端を喰いちぎり咀嚼もそこそこに呑み込んでゆく。折に触れて、フルボトルかピツチャードを煽る。多少、口許から垂れても気にしない。フライドチキンやハツシユドポテトもピザを食する合間にしつかりと摘んでいた。

「特には。手頃なオトコ力モつてるだけ虚空を見遣つたまま奈津樹は応えた。そして、反問した。

「アンタは？」

元春はすこし躊躇つてから、応えた。

「スロットばつかだ」

「仕事は？」

「三月と続いたことがない」

「どうして？」

「わかんねえ」

会話の段落に差し掛かつた。二人は、それぞれに、話の糸口を探る。

元春が先取した。

「ミホに最初に逢つたとき『何してんだ？』って訊いたらよ、ミホさ、『当たり屋』って云いやがつた」

元春は思い出し笑いをした。奈津樹もつられて頬を弛めた。

「アタシのときは『サークัสの団員。象使いなんだ』だった」

室に咲笑が爆ぜた。

「でも面白いヤツだつたな。チヨーシ悪いとさ、『あー、スクランブル交差点にバズーカ撃ち込みてー』とか吼えてたしよ」

「人混みがキライなくせに渋谷好きなんだよね

いつか元春も奈津樹も在りし日のミホに思いを馳せていた。笑い話の余韻と入れ替わりにあの事件の記憶が甦つてくるのを二人とも察知した。

「次のニュースです」

点けっぱなしのテレビが、窮地を救つた。

「深作一家一斉家宅捜査」のテロップが画面下部に出力された。

「先日、都内のマンションの一室から大量の銃器が発見された事件で捜査本部は都内各所の指定暴力団・深作一家拠点を強制捜査しました」

憤怒を湛えた形相の構成員たちを後目に捜査員らが資料類を梱包した段ボール箱を次々

と運びだしてゆく映像が流れた。構成員のうちの一人が詰め掛けた報道陣に怒号を浴びせかけているところでビデオは終わり映像はスタジオのそれにスワイッチされた。 果たして、深作一家は解散を余儀なくされる。そして、名だたる組を壊滅に追いやつた張本人は的にされることがなくなつた。

「解散つて……再結成したりしないのかな」

腹這いになつた奈津樹が問い合わせた。

「……バンドじやねえんだからよ」

元春は決まりが悪そうに貌を強張らせていた。

深作一家壊滅の報を消化すると、再び、ミホを巡る思考が頭を擡げた。

何故、ミホは死を選んだのか？

元春も奈津樹も、確証こそないものの、

その答に勘づいていた。

だからこそ、二人とも、口を噤んだ。

背中は俄に挙動のテンポを速めた。係員が怯んでいる隙に、散開した。

### 三フロアを縦断する吹き抜けの麓には、二

#### フリーズ

十代半ばと思しきカツプルの姿もあれば、子供が成人していてもおかしくない年頃のカツプルの姿もあつた。ショウケースがフロアの外縁をなぞつていて、更にフロアの中央を取り囲むショウケースも設置されている。床はよく研磨された石材だ。オーソドックスな身だしなみの係員が点々と待機していて、接客をしている係員もいた。

ヴァイオリーンの旋律がいつ果てるともなく円やかなラインを描き続いている。ショウケースに収められているのは、貴金属類だった。特注したのかやけに眩しい照明だ。恐らく鉱物がより映えるのだろう。カツプルたちは明るい表情でショウケースを覗いては笑顔を交わした。

エントランスに三つの背中が近付いてきた。係員が恭しくもガラスドアを開いた。三つの

音響のよい空間だけに、よく通つた。そこに居合わせた人々は、峻烈な声に撃たれ、凝固した。三人組は、いずれも外国人だつた。名を、それぞれ、ミルズ、ケイト、ウイルといった。

三人ともサブマシンガンを携行していた。甲高い悲鳴があがつた。それに共鳴するかのように場が騒然となつた。

乾いた銃声が連なつた。忽ちにして、被害者一同は沈黙した。空薬莢が床に衝突する金属音が明瞭に聴こえた。威嚇のバースト射撃だつた。ミルズが自らの意志を誇示するかのよう人々を見回した。火薬の匂いが嗅細胞を刺激した。

「おとなしくしている」

ミルズは、警告を言葉に直し、ケイトを従え、歩を進めた。一步毎に人々が身震い

し、空気が引き攣った。ミルズは散策でもするかのような足取りだつた。ケイトが歩く度に誇張ではなく西瓜のようなその乳房が揺れた。

ウイルを一階に置いて、ミルズとケイトが上階へ移動した。

階段を昇り切ると、銃口を四方に向けながら、前進した。

係員が恨めしげな視線を向ける。不安げな表情の妻を夫が抱き寄せる。ファイクションでしか識らないサブマシンガンを衝きつけられた若い女性係員が泣きじやくる。ケイトはそれが気に入らないようで、彼女に対してサブマシンガンを振り上げてみせた。ミルズに窘められ、ケイトは舌打ちして、彼女の前から立ち去つた。

フロアの奥に、高さが一五〇センチほどの四角柱があつた。幾条もの光によつて照らされている。四角柱の上部はガラス張りだつた。ガラスの内側では、仰々しく冠が鎮座して

いた。ベースはゴールドで、苦み走つた光を放つていた。眼を凝らす。すると、表面にダイヤやサファイアやルビーの粒子が鏤められているのが判つた。そして、額には、ギター・ピックほどのダイヤが埋め込まれていた。燐然と輝いていた。白い光芒が眼を射抜いた。

冠と対面したミルズは陶然としていた。

「待たせたな。ベイビー」

ガラスケースをさすりながら、甘い声で囁いた。

「はやくアンタの立派なモノで女にしてや

りな」

呆れた様子でミルズの後ろ姿を見遣つて

いたケイトが促した。

「云うに及ばねえ」

四角柱の傍に二人の警備員が張り付いていた。二人とも、焦点の定まつていない眼つきだつた。ミルズは二人に対して静止しているようにとの目配せを送つた。徐に、

サブマシンガンを構えた。

くしやくしやになつた煙草のソフトケースから最後の一本を取りだしたのはキダだった。ジツボの金属音が鳴り、オイルの匂いが辺りに漂つた。一服して、ハイネケンの缶を呷つた。

夜更けの路地裏の行き止まりに、元春たちが集まっていた。思い思いに、トマソンと化したガードレールやフェンスに腰掛けている。煤けた壁に書き殴られた落書きがラフでヴィヴィッドだ。

総勢は六人だった。

元春の傍で煙草をふかす奈津樹の他にもう一人のオンナがいた。近寄り難い雰囲気を放つ奈津樹とは対照的なタイプのひよりだった。柔軟な貌だちとたわわな乳房が特徴だ。キダとエアリーはやたらとひよりに構つていて。モリシゲが、一人だけ埃の積もる地べたに

座り込み、鋭利な眼つきで黙々と煙草を喫い続けていた。瘦せぎすで背も低いが貌つきは至つて精悍だった。

元春はふと奈津樹に耳打ちした。

「こいつらでだいじょうぶか？」

奈津樹は辟易したよう眼を細めた。

「もう巻き込んじやつたんだからしようがないでしょ」

元春は渋面をつくり頭を搔いた。

キダとエアリーは元春の呑み仲間で、ひよりとモリシゲは奈津樹が連れてきた人材だった。

「あいつら何？」

質問が続き、奈津樹は煩そうに応えた。

「ひよりはカード破産寸前のフレゾク嬢。モリシゲは……かなり前に力ネ貰つてエッチしたことあるんだよ」

「奈津樹トモダチいねえのか

「うるせえ」

奈津樹が毒づいた。

「モリシゲは何やつてるんだ」

「演劇？なんかさ、自分で舞台をやるんだつて。でも安くても一〇〇万はかかるらしいから……そっちの連れてきた二人は？」

「キダはフリーターで、エアリーはなんかのショップの店員」

「エアリーって何？」

「『空気より軽い』」

奈津樹が項垂れた。その意味を汲みとれず元春は狐に抓まれたような表情だつた。

したボックスの客に会釈しながら、悠然と歩いてゆく。人工的な笑みは、整然として対称を実現していた。綾香は売れっ子ホストのグループが陣取る席についていた。ボーイが慌てて駆けつけて呑みものを訊いた。

ボーカーの停めた車列が大通り沿いにどこまでも続いていた。通りに面したビルディングはいずれもネオンが鈴生りだ。人通りが多く賑やかだが、若者や子供の姿は見当たらぬ。

一台のRV車が交差点を折れ、車列の僅かな切れ目に割つて入った。

クロマティックにウッドベースの音程が上下する。馥郁と薫る甘い匂いは眠りを誘つているかのようだ。見回せば、容姿と衣装が相俟つて華やかさを醸しだしたコンパニオンたちが艶笑交じりにそれぞれ接客している。醉客たちは、彼女たちと戯れ、次第にくだけてゆく。

席が埋まる頃に、綾香が現れた。通路に面

エンジンの音は鳴り止まなかつた。助手席のドアと後部座席の左右のそれが一齊に跳ね、次々と搭乗者が躍り出てきた。一同は、いずれも黒装束に目出し帽のスタイルで、ペラペラのバッグを背負つていた。大挙して玄関を駆け抜けた。ぐずぐずし

ていたボーイは弾き飛ばされた。散開した一同は躊躇うことなく火気を構え全方位を射程に収めた。

### 動くな

呆気にとられていた被害者たちは、やつと我が身に何が降り掛かってきたのかを理解した。俄に騒然となつた。

奈津樹が飛び出した。カウンターによじ上り、天井めがけてサブマシンガンを乱射した。水を打つたように、店内が静まり返つた。

一団は、三々五々、動き回り、店に居合わせた人々を牽制する。

### 全員手挙げろ

被害者は、皆、従順だつた。だが、挙手だつた。

### 両手だ

間髪を容れずに宙に衝きだされた掌の数が倍になつた。

一団は、従業員・客の所持品を物色し始めた。金目のものを次々と持参したカーキ色の

ランドリー・バッグに放り込んでゆく。

人質のうちの数人が携帯電話によつて外部への接触を試みていた。強盗団の一昧が携帯電話を操作する人質に気付いた。

### 轟音が爆ぜた。

天井へ向けた威嚇射撃だつた。携帯電話を操作していたホステスは驚愕の余りに携帯電話を床に落とした。再び、銃声がした。ホステスの落とした携帯電話が撃ち抜かれ、人質の間からどよめきが起つた。

「おい」

リーダーと思しきメンバーがガンマンを窘めた。ガンマンは気分転換に立ち位置を変えた。

強行犯に似つかわしくない体格のひよりが、せつせと小物を採集する様はどことなく間が抜けていてシユールですらあつた。

「あ、これ、欲しかったんだ」

コンパニオンの差し出した財布を手にし

たひよりが素つ頓狂な声をだした。

「現金だけで勘弁してよ」

コンパニオンが懇願する。

ひよりは腕組みしてすこし考えた。

「ううん、それならいいよ。はい」

ひよりはそのまま財布を返してしまった。

キダとエアリーは貌を見合せた。

エアリーは、ひよりがテーブルの上に差し出された小物を搔き集めている間、キダとともに警戒に当たるのだが、そのテーブルに見事な乳房をしたコンパニオンがいて、エアリーはその胸許に眼が釘付けになつた。目出し帽を被つても眼を丸くしたのが見て取れた。

「おい」

キダの呼び掛けに我に帰ると、キダとひよりは既に隣のボックスに移っていた。

元春は、全体をバツクアップしており、双手でそれぞれ拳銃を衝きだし、四方を隈無く

監視している。奥のボックスにいた綾香は、ホストに囲まれ、虚ろな眼つきで眼の前で繰り広げられている光景を眺めている。

営業時間外ならざしらず満席だというのにホールが寂寥としていることに綾香は我が眼と我が耳を疑つた。自らの城が荒らされているのを看過できる筈がない。綾香はともに蜂起してくれるものと馴染み客の顔色を窺つた。だが、誰もが眼を逸らした。憤怒が綾香を覆つた。

ひより一座が綾香たちの席に廻ってきた。「持つてるものをテーブルの上に出してくださいね」

柔軟な口調で要求を口に出しながら、ひよりは小頸を傾げてみせる。綾香と客のホストたちは意表を衝かれフリーズした。

「早くしろ」

キダが喚き、被害者一同は慌てて要求に従つた。

ひよりが跪いて、綾香の財布に手を伸ば

したとき、綾香は思わず、ひよりの手頸を掴んだ。すかさずエアリーが綾香の手頸を掴んだ。

「じつとしてな」

綾香は怖ず怖ずと手を離した。

奈津樹がつと身を翻してホールの奥へ突進

した。忽ちにして、いかにも高価そうなドアの前に辿り着き、開けようと試みた。施錠されていた。奈津樹は躊躇わずにドアノブめがけて銃弾を放ち、ドアを蹴り開けた。奈津樹が踏み込むや、鏡の前に蹲つたのは突入時にトイレに立っていたコンパニオンだった。奈津樹は有無を云わさずにコンパニオンをフロアへ引きずり出した。コンパニオンが握り締めている携帯電話を引つたくる。発信履歴を検め、仲間たちの溜まっている方を振り向いた。

ら嘆息が漏れた。

「ゴーラド、ついてこい」

元春が厨房ならびに控え室に到る通路に飛び込む。奈津樹が後を追う。扉はふたつあり、一つは従業員の控え室だった。元春は奥に位置する扉を潜つた。奈津樹も一足遅れで元春に倣つた。

元春と奈津樹が立ち入ったのは、綾香の執務室だった。立派な執務机が鎮座している。ハンガーにビニールの掛かったスツヅが二・三着掛けられている。元春は執務机の背後にあるクロゼットを開けた。クロゼットは金庫が独占していた。

「番号は？」

元春は携帯電話を取りだした。金庫にはタッチパネルが付いていた。

焦る奈津樹を余所に元春は携帯電話を操作している。

「あつた」

全テーブル制覇は成らず、強盗たちの間か  
「撤収」

元春は携帯電話のディスプレイに出力さ

れた数列を見ながら、金庫のタッチパネルを操作した。数列を入力し終えて、エンターキーを押した。金属音がした。奈津樹は元春をまじまじと見た。

金庫には、札束が山と積まれていた。二人がかりでそれを根こそぎにした。

元春と奈津樹がホールへ戻ると、今度こそ、撤収だつた。被害者たちを牽制しながら、アプローチを潜り、扉を閉じようとしては消化器に阻まれているエレベーターに飛び込んだ。

エレベーターが一階に着いた。エントランスに到り、一同が安堵しかけたとき、サイレンの音が割り込んできた。一同の間に動搖が疾る。ややあつて、奈津樹がいち早く立ち直った。

「ひより、マスクとつて

「え？」

「いいから早く」

奈津樹も素顔を顕わにした。訝りながらもひよりも奈津樹に倣う。奈津樹は所持品を元

春に押しつけ、ひよりも所持品を他のメンバーに預けるように指示した。

「他の皆は隠れてて」

奈津樹の意図するところが判らないまま、元春・キダ・エアリーは物陰に隠れた。やがて、二人組の制服警官が現れた。奈津樹は豹変し、警官の許へ駆け寄つた。

「早く。七階です」

ひよりも奈津樹の意図を悟り、奈津樹に続いた。

「皆を助けてあげてください」

ひよりは警官に縋り付いた。

俄然、警官二人組は緊張し、エレベーターに駆け込んだ。エレベーターの扉が閉じるや、奈津樹は仮面を脱ぎ棄て元春たちに合図を送った。

パトカーの到着に動転していたモリシゲだが、エントランスからばらばらと現れた黒装束集団を視認すると、内側から助手席・後部座席のロックを解除した。

しんがりの元春が乗り込むと、モリシゲはクラッチを繋いだ。ドアが半開きのまま、ワゴンは発進した。甲高いスキッド音が夜の帳を震わせた。

強盗団が撤収するや喧騒がフロアを覆い尽くした。通報しようと携帯電話を取りだす者もいれば、未だに我が身に降り掛かった災いを事実として受け止められずに啞然とする者もいた。洗面所から引きずり出されたコンパニオンの許にボーイとコンパニオンが駆け寄り安否を問い合わせている。席を立つてみたものの然るべき行動が思い当たらずに立ち尽くす者がいれば、取り敢えず煙草に火を点ける者もいた。さつきからコンパニオンの傍若無人な慟哭が空気を震わせている。ボーイたちも動搖から立ち直れずにテーブルの間を右往左往するばかりだった。

綾香はといえば、憤怒の惹き起こした眩暈に襲われ、客であるホストの一団から気遣わ

れる始末だった。

いつから廃墟に成り下がったのか定かでないガソリンスタンドの車寄せに元春たちの車が停まっている。車寄せの一角にガラス張りの休憩所があり、その二階がオフィスになっていた。

逸る気持に急き立てられながら一同は車座になつた。

元春が膨らんだ洗濯袋を取りあげた。  
「いくぞ」

一同は息を呑んで事の推移を待つた。

カーキ色の洗濯袋をひっくり返す。床一面に紙幣や財布やアクセサリーがぶちまけられた。期せずして歓声が湧き起つた。キダが興奮を抑えきれずに奇声をあげる。ひよりは頬を上氣させている。モリシゲは平静を装つてはいるがいつもよりも顔色がよい。変わりないのはエアリーくらいだ。

元春の眼が爛々と輝いている。奈津樹もら

しくなく浮かれていた。

誰からともなく一同は集計作業に取り掛かった。

札束を数える。時計やアクセサリーを小分けにする。手分けして財布から中身を抜き、

車座の中央に重ね上げてゆく。

誰も口を利こうとしなかった。一同が一心不乱に紙幣を繰り、紙の擦れる音だけが絶え間なく連なっていた。

一時間と経たずに集計は終わつた。

現金だけで四千万近くあつた。小物類は買ひ叩かれたとしても二千万はくだらないだろう。

一同は暫し歓喜に酔い痴れた。

通行人らは羨望の眼差しを向けた。思わず足を止める者さえいた。

元春はご満悦といった様子だった。

大階段とエスカレーターを備えていて、隣接するビルの外壁に巨大ディスプレイが据えつけられた広場は、例によつて賑わつていた。ビラ配りの連中が手ぐすねを引いて通行者を

待ち構えている。

広場に、マスタンングが横付けにされた。魁偉なフォルムのアメ車だけに人目を引いた。やや勿体つけて、ドライヴァーが降りてきた。

元春だった。珍しく髪をセットし、サングラスをしている。

元春に続いて、白人女がマスタンングから降りてきた。昨晩、元春が引っ掛けた女で、名をシャロンといつた。

元春とシャロンは擦り寄り、歩きはじめた。元春はさりげなくシャロンのきゅつと縊れた腰に手をやつた。シャロンの金髪が陽光に映えた。

元春はシャロンを伴つて敷居の高い焼肉店の二人では広すぎる個室にいた。高価な

品目ばかりを用意させ、ワインはボトルで頼んだ。シャロンは元春の隣に着席し、歓心を買おうと頻りに元春の頬や腕を撫でていた。

霜降り肉が焼けた鉄板に載せられる。忽ちにして水分の蒸発する音が爆ぜて食欲をそそる匂いがたちのぼった。

遮二無二、飲食した。時には、互いに相手の口許まで食材を運んでやる場面もあつた。ボトルが半分になると逐一グラスに注ぐのが億劫になり、元春もシャロンもボトルごと呷つた。果ては給仕を喚び、一人一本ずつということでボトルを二本頼んだ。支配人が聞き違えを疑つて確認にきた。

元春はシャロンの後ろ髪を鷲掴みにして仰け反らせるとボトルを呷つた。赤をたっぷりと口に含み、シャロンの唇を塞いだ。零れた液体が顎を伝い、シャロンの胸許を濡らした。存分に食欲を充たしてから、国内外からの観光客しか利用しないようなホテルの玄関を潜つた。

シャロンとベッドに縛れ込み、手荒に衣服を剥ぎとつていつた。恣に、シャロンの躰を貪つた。様々に姿勢をとらせ、分け入つた。空調が効いているにも関わらずに双方とも汗を搔いていた。三度果てて、やつと元春はシャロンを解放した。

呼吸を乱したまま、元春は煙草に火を点けた。煙草が短くなるにつれ、呼吸は整つていつた。呼吸が整うにつれ、高揚感は薄れていた。ふと元春は隣を見遣つた。金色の体毛をした白い肉の塊が横たわつている。やはり呼吸を乱していて、息継ぎする度に肉塊は収縮した。肉の壁は汗ばんでいて、鉄板に引いた牛脂のようだつた。元春は衝き落とされた。胃が充たされるにつれ豪華な食材が帶びていた魅力が色褪せていつた。マッティングにしても一度試乗してみたかつただけで、所有したいという欲求は湧かなかつた。俄に元春の貌が蒼白になつた。

シャロンが寝返りを打つて元春に抱きつこうとした。思わず元春は貌を背け、キスを拒んだ。シャロンは元春の変化を察知できずには尚も元春にまとわりついた。

元春はシャロンを衝き放した。シャロンは愕然と元春を見返した。元春はジャケットから札束を抜き、シャロンに放った。シャロンは母国語で何やら悪態をつきながらも札束は受領し室を出ていった。

元春はベッドに拳を衝き立てた。

奈津樹はバスルームから出るとまず煙草に火を点けた。奈津樹の裸身は清冽で眩かつた。肌はよく水を弾いた。均整のとれた骨格をうつすらと筋肉が包んでいる。形のよい乳房の斜面に静脈が透けている。

水の滴り落ちる髪を拭いながら、鏡像を見据える。相変わらず威力のある視線だった。切れ長の双眸は剣刃のように剣呑で鋭利だつ

た。咥えていた煙草が邪魔になり、洗面台に吐き棄てた。

リビングへ戻ってきた奈津樹はミントの下着を着けていた。次の煙草に火を点け、チンザノドライを用意し、ソファに腰掛けた。一口呑んでから、携帯電話に手を伸ばす。

広い窓からとめどなく陽光が注いでいた。強い光が深い影をも創りだしていた。光と影の境界線が奈津樹に袈裟のように掛かっていた。

携帯電話をテーブルに置き、ひとかけのライムを放り込んだグラスを傾け、柑橘類のペパミントな薰りを愉しんだ。

ふと奈津樹は陽光を気にした。手を翳し、太陽を仰ぎみた。発光する水晶は力強く、奈津樹は気圧されたらしく、ばつが悪そうに貌を背けた。

日没を待つてクラブへ足を運ぶと顔馴染みと一緒になつた。

「奢つてあげるから何でも頼みな

「え、いいの」

アイコは歎声をあげた。

奈津樹は眼を細めちいさく頷いた。メニューをしげしげと眺めるアイコは、奈津樹よりも一つか二つ年下だ。定時制高校に通つていて、昼間はアルバイトをしている。流行りの髪形や服装を実践しているのが痛々しくも健気だった。

奈津樹とアイコは、三〇分程度、グラスを傾けながら会話した。とりとめのない話だった。

束の間の沈黙の後、奈津樹が口を開いた。  
「どつか行きたいとこつてある？」

唐突な質問にアイコは戸惑った。戸惑つてから、回答した。

「ホスト、かな？」

「よし、じや、いますぐ行こう」

奈津樹は起ちあがつた。

「え、待つて、待つてよ」

アイコは慌てた。奈津樹はもう歩きはじめていた。

散発的に行われる店内放送が喧しい。ボトルが売れる度にその旨がアナウンスされる。

現物が席に運ばれでは、手の空いているホストが集まり、短いアカペラもどきを客に贈呈した。

店内の至る所に鏡が張られている。鏡を多用することで実際よりも広さがあるように見せ掛けている。内装はやたらとゴールドがあしらわれていて、明るすぎる照明と相俟つて、眼を疲れさせた。

店の一画では、アイコが、接客されて、はしゃいでいた。人懐っこいホストは愛玩動物のようにアイコにじやれつきアイコの興味を逸らさぬよう必死だった。

アイコの傍に奈津樹がいた。奈津樹にもホストがついていたが、このペアはアイコ

のペアとは様相が異なっていた。

アイコのリクエストに応じてホストクラブを訪ねはしたもの、奈津樹は居心地が悪そうだった。ナルシストが話し掛けてくるのに、不承不承、対応はしていたが、話を膨らませてやろうという親切心は湧かなかつた。矢継ぎ早にナルシストが話題を持ち掛けたが、奈

津樹は期せずしてその芽をことごとく摘んだ。やがて手札を失つたナルシストは口ごもつてしまい、隙間風が吹き込みはじめた。一方のアイコは、スポンサーの機嫌などお構いなしに、宴を満喫していた。話し相手がいなくなつた奈津樹は自ずと酒が進み、いつか適量をオーヴァーしていた。

紙幣の紙吹雪が舞つた。奈津樹の仕業だった。子供じみた強欲さに形を与えたような内装の店内に乱舞する紙幣というコラージュにウイットはなかつたが逃え向きだつた。

歓声をあげて、アイコもホストも床に這い蹲つた。

奈津樹の奇行はアルコールのせいだつた。ほんの景気づけのつもりだつた。だが、裏目に出た。眼の色を変えて床に這い蹲つたアイコやホストは堪らなく浅ましかつた。俄に奈津樹は蒼褪めた。

巨大な建造物の敷地に立ち入ると圧倒されてしまう。数キロの距離を置かなければ全貌を見渡すことができない。この宮廷のレプリカは、時の為政者の破格の自己顕示欲の投影なのだろう。

光も影も最も烈しい頃、元春と奈津樹は都庁の噴水前で落ち合つた。

「調子どうだ？」  
「相変わらず」

「あいつらどうしてる？」

すこしだけ奈津樹は考えたが、すぐに「あいつら」が指示するものに思い至つた。ひよりは借金を完済したものの懲りずに

ショッピングに勤しんでいる。モリシゲは劇場を押さえ、稽古に入つた。

「アンタが連れてきたあの二人は？」

キダは服や靴やアクセサリーをたらふく買ひ込んだ。エアリーは、最新型パソコンを購入して、やたらとパーツを替えてスペックを高めること自体を愉しんでいる。

「それで……オマエはどうしたんだ？」

「アンタこそ」

「マスタング買つて涎が出そうなくらいのイヤ女モノにして……愉しんでるよ」

奈津樹は、元春の話の内容をイメージしてみているらしく、上の空になつた。

「オマエは？」

奈津樹は我に帰つた。

「値段気にしないで買い物しまくつたりトモダチと美味しいもの喰べたり……」

会話の段落が訪れた。二人はそれぞれに会話を続ける糸口を探していた。ややあつて、二人が同時に口に出した。

「でも……」

二人は貌を見合せた。

見るからに苛立つてゐることが判る。綾香は髪を振り乱しながら遮二無二ダーツ目掛けて矢を投じてゐる。

矢が衝き刺さる際の音圧は軽やかなそれではない。失投によつて高い響きをあげてダーツが折れると、綾香は癪癩を起こし烈しい舌打ちを放ち持つっていた残りの矢を床に叩きつけた。

乱雑にアイスをグラスに放り込みカミユを湯水の如く注ぎ暴々しく呷る。

あのとき、綾香は思わずソファから腰を浮かせた。すると、すかさず、叱責が飛び、銃口を向けられた。

銃口の暗さは冷え冷えとしていてまさしく死を象徴していた。

思い出す度に恐怖と憤怒が絹い交ぜにな

る。負荷により、神経が悲鳴をあげる。琥珀のアルコールが着衣を濡らしそのたわわな乳房の形が顕わになつてゐる。

信じたくない光景を脳裏で再生する作業は苦行に近かつたが、綾香は持ち前の強靭な意志によつて、かかる作業を続けた。

次々と押し入ってきた目出し帽の賊たちは、総勢五人だつた。

二人は体型からして女だつた。かつて店にいたコンパニオンかも知れないが、判然となかつた。

残るは三人。そのうちの一人の身長は綾香以下だつた。綾香は一七九センチの長身だ。背丈が綾香以上の二人のうちの一人はやや骨太でむさ苦しい体型だつた。目出し帽の後ろから襟足が覗いていた。

残る一人の肉体はよく彫琢されてゐた。細長い四肢は柔軟ながらも逞しさも兼ね備えていた。

綾香の表情が微妙に変化した。一層の記憶

の微分化を試みて、自ずと渋面になつた。

しなやかそうな四肢の男は、拳銃を振り回しながら、方々に指示を出していた。司

令塔は手の指も細長くて性的だつた。演奏家のような手だつた。数多の男と浮き名を流してきた綾香だが、司令塔のように完全な肉体を持つた男は思いつかなかつた。ふと司令塔の眼つきが脳裏を過ぎつた。深くて、意図を読み取ることができないそれだつた。

本能を剥きだしにして挑んできた若き雄の胸板が不意に割り込んできた。

綾香は刮目した。胸板から視線を転じると、司令塔の眼つきが現れた。

綾香を犯していたのは、元春だつた。

「あれを取り返さなければ俺は破滅なんだ」

絶叫したのは五代だつた。憔悴しきつて

いて、精彩を欠いている。五代はコンクリート打ちっ放しの室にいた。勧められたソファに座り、躍起になつて相手に訴えかけていた。

「もう一度稼ぎ、もう一度天下をどらなきやいけないんだ俺は」

五代のこめかみに血管が浮かび上がっていた。額に汗しており、後れ毛がへばりついていた。

「このまま終わって堪るか。畜生、あのガキ

……」  
黙つて聴いていたインタヴュアーがやつと口を開いた。

「おたくの意気込みはどうでもいい」

話の腰を折られた五代は不快感を顕わにした。インタヴュアーは、怯むことなく五代を見返した。刺すような眼つきに、五代は気圧され、悄然と俯いた。

インタヴュアーは、見事な鼻梁と丈夫そうな顎が特徴的だつた。体躯は重量級のボクサーのようだ。四肢が長く、モデルでも通用

しそうだ。名を麻宮といつた。

「順を追つて話してくれ。必要なことだけでいい」

五代は平静さを取り戻し、訥々と語りはじめた。麻宮は、時折、安物のボールペンでメモをとつた。

麻宮には、ただならぬ風格があつた。それはちょうど尊敬と恐怖を一身に集める王のようだつた。

綾香は受け取った名刺をさらりと一瞥し、「聴かないわね」と所属についての率直な感想を漏らした。

「会社が倒産しまして……」

綾香と対座しているのは二人組だつた。綾香に相槌を打つたのは中年で、中年が「会社」を「クミ」と云い間違えたが、綾香は聴き流した。

「終身雇用は幻想でした」

中年の従えてきた青年が云い添えた。

テーブルに蓋の開けられたシガレットケースが置かれている。綾香は新しい煙草に火を点けた。ライターはダンヒルだった。一服して、視線を水平にあげた。

「こいつを搜して頂戴」

テーブルの端に載せた一枚の写真を前方へ圧しだした。写真は人物のバストショットだった。被写体は紛れもなく元春だった。

「多分、新宿にいる筈だから」

相手に異変があった。綾香は訝つて相手を見返した。写真を持つ手が震えていた。俄に、相手の全身から憤怒の波動が発された。

「こいつ

相手の連れが素つ頓狂な声をあげた。

「識ってるの？」

綾香は身を乗り出した。

「いえ」

綾香の相手とは、東尾だった。連れは、本木だ。本木は東尾の横顔を盗み見て口を噤

んだ。綾香は疑いを抱いたもののさつとそれを葬り、本題に戻った。

「多分、新宿にいる筈だから」

猛禽の眼が綾香の一言一句を聴き漏らさない意志を物語っている。

「ケータイは番号変わつてたし、元春つて名乗つてたけど本名か判らない。私がカネをだしてやつた室もとつくに引き払つてる」

「新宿……」

「力ネに糸目はつけないから、絶対、生け捕りにしてきて頂戴」

麻宮がラブホテルと風俗店が入り乱れた界隈を歩いている。歩いているうちに現実感が稀薄になつてゆく。それにつれ、麻宮の機嫌は損なわれていった。通りに面した奇抜な造りのビルディングに足を踏み入れた。扉一枚を隔てた内側は、耳障りな爆轟

と目障りな光が渦巻いていた。見るからにつむの軽そうなガキが結集しそわそわしている。麻宮の不快指数は目覚ましい飛躍を遂げた。

こんな仕事はさっさと終わらせたかった。踊つていな連中に見当をつけ、声を掛けた。舌足らずな喋り方や姿勢の悪さが麻宮の瘤に障る。しかし麻宮は堪えていた。さんざ勿体つけてから、腑抜けは応えた。

識るわけねえっての

仲間と貌を見あわせて哄笑をあげた。

応えた目尻の垂れた若者は忽ち床に叩きつけられた。

「忙しいんだ」

麻宮は足許に転がした若者に吐き棄てた。

若者の連れが麻宮に飛び掛かる。麻宮の举措が俄に勢いづいた。麻宮の右から攻めていったアロハシャツは麻宮が衝きだした肘を避けきれずに自ら衝突した。麻宮はアロハシャツを迎撃した方の腕を振り、向かってきた団体

ばかりでかいが一人じや何もできなさそくな独活の大木の左耳を無造作に掴むや縦に振り下ろした。

アロハシャツは滾々と噴きだす鼻血に愕いていた。独活の大木は左耳を手で押さえ唸つている。既に三人とも無力化していた。麻宮は嘆息を漏らした。口ほどにもない三人組に辟易したふうだつた。麻宮がしゃがみこむと三人組は同時に怯懦に弾かれた。

「おい」

「は、はい」

「見覚えねえか

「見たことはある。けど、知り合いじやねえし……ここんとこ見掛けない

「ガセじやねえな？」

麻宮は視線に僅かばかり力を込めた。目尻の垂れた若者はしつこく何度も頷いた。

それがまずかった。

「バカにしてんのか」

そうではなかつたのだが、麻宮は頭突き

を見舞つた。目尻の垂れた若者は呻き声と共に白目を剥いて再び硬いフロアで就寝した。

麻宮からの連絡は疎らだつた。ステアリングを操る五代の表情は冴えない。判つていたこととはいえ、いざ直面してみると、滑落することに恐怖を覚えた。誰もが、五代がしくじつたことを識つてゐる。

陰で嗤笑されていることは想像に難くなかった。取得率が四〇パーセントを超える前後で、意図を悟られた。

おまけに兌換貨幣とおもわれていた日本有数のグループ企業の株まで紙切れ同然になつた。事ここに到り、五代はやつと自らが綱渡りのさなかだつたことをおもひだした。

セレブ向けのホテルと見紛うほどに豪奢な外観のマンションがドアウインドウに映る。いつまでここに帰つてこれるのだろう。五代は投げ遣りに息を吐いた。

漆黒の闇に紛れうる黒のレオタードがケイトのインテグラルなプロポーションを浮き彫りにしていた。

トランシーバーが雜音混じりの音声を届けた。ケイトは端的に応答すると、やおら、屋上のエッジへ歩を進めた。

地平線に背を向け、コンクリートをキックして、夜空へダイヴした。巻かれていたロープがするすると解けてゆく。

振り子になつたケイトの躰が外壁へ弧を描いてゆく。衝突する寸前に外壁を蹴り、再び、宙を舞う。

軽々と高度を下げてゆき、やがてある出窓の上に載つた。だが、依然として、高度は五〇メートル以上だつた。

コンクリートマイクで壁の向こう側の様子を窺つてから、ガラスを灼き切つた。

リビングを通り、一旦、玄関までいって、鍵を開け、リビングに戻つた。

五代はバスローブを髪をタオルで拭いながらリビングへ戻った。五代は啞然とする他なかつた。

「どうした？」

俄に入浴によるリラクゼーションは無効になつた。

剣呑な眼つきのアイスブルーの瞳は、いきり立つたシベリアンハスキーを想起させた。

「ブツはどこ」

英語だつた。五代にも理解できる程度に易しかつた。惚けたまま、五代はかぶりを振つた。

ケイトは柳眉を逆立てた。

「調べはついている」

五代が説明を英訳しようと口ごもつているといきなりケイトがハンドガンの薬室に初弾を装填し五代に衝きつけた。

「待て、ウエイト、ウエイト プリーズ」

しどろもどろになつて五代は制止した。

玄関の扉を開閉する物音がした。ミルズ

だつた。UILは階下で見張りをしている。ミルズは家主を無視してハンドガンを構えたケイトに寄り添つた。

「どうした？」

「素直じゃないの」

ミルズもハンドガンを抜いた。

五代は、躍起になつて弁解を試みた。コミニケーションの果てに、五代はやつと事情を説明することができた。事情を呑み込んだミルズとケイトがやおら五代に向きた。直つた。

「このウスラトンカチ」

ミルズの鉄拳に五代は仰け反らされた。

元春と奈津樹は、ラバー製のテーブルクロスに幾度となく腕に張りつくのに煩わされながら食事を摂つていた。元春も奈津樹もスプーンで口に運んでいるのは炒飯だつた。中華料理のそれやピラフではなく、タ

イ炒飯だ。元春も奈津樹も汗だくになりながら咀嚼もそこそこに次から次に米粒の塊を口の中へ放り込んでゆく。スープを啜り、水をがぶ呑みする。別に早食いで料金が無料になるというようなサービスは行っていない店だ。

二人揃つて煙草に火を点けた。テーブルには驚異的な早さで平らげられた皿二枚が載っていた。タイのビールで喉を潤しながら、食後の一服を堪能した。タイ人の給仕が皿を下げにくる。

「ピクルスと、これふたつ」

元春は空瓶を振つてみせた。

次のビールが運ばれてきて、奈津樹が食後二本目の煙草に火を点けた。

「タイ料理ってなんでこんなにうめーんだ？」

「さあね」

奈津樹はナプキンで汗を拭き取った。「このあとどうする？」

奈津樹は煙草を咥えたまま考え込んだ。  
「じゃ、あそこで暇潰すか」

珍しく元春が独断を下した。

奈津樹がベンチにふんぞり返っている。  
断続的に金属音が鳴り響いている。

機械仕掛けのアームが軟球を投じる。元

春が渾身のスwingを披露する。だが、金属バットは虚しく宙を切り、軟球が衝立に直撃して鈍い音を立てた。ネット裏の奈津樹は元春の不格好さに笑い転げた。

元春は忌々しそうに奈津樹を一瞥して仕切り直す。アームが軟球を掬い、ゆっくりと持ち上げる。

バットが鳴った。打球はピッティングマシーンの防護ネットに衝き刺さつた。

奈津樹が唸る。元春は得意そうな笑みを覗かせた。

庄巻は、次の打球だった。ピッティングマシーンから軟球が弾き出されるまでの僅かな間、打席に立つ元春は云うに及ばず、見

守る奈津樹までも固唾を呑んだ。

軟球が勢いよく飛び出した。元春はテイクバックした。

離れた位置で金属音が爆ぜた。センター返しをアナログ時計の一時としたならば一〇時を指すライナーだ。

件の打球が、元春に向けて投じられた球に触れた。軌道が変わりスウェイングを開始して、いた元春の頭部めがけて飛んできた。

情けない悲鳴があがつた。

奈津樹は、うつすらと泪さえ浮かべていた。

帰る道すがら、奈津樹はまだ笑っていた。

「いや、割と面白かったよ」

「うるせえ」

陽光に晒された歓楽街は間が抜けていて索然とする。人通りは多いが、その顔触れは宵のそれとは異なる。夏休みの時期とあって、若者の姿が多い。

そぞろ歩く元春と奈津樹の後ろ姿を注視する視線があった。一定の距離を置きつつも相

対速度はゼロだ。尾行者は長身で、文字通り、元春と肩を並べうる身長を誇っている。脚が長く、ストライドが広い。

サングラスを掛けた麻宮は虎視眈々と好機の到来を待ち構えていた。雑踏に紛れ獲物をつけ狙う様は静的だが動的だつた。

元春と奈津樹はといえば、溢れ返るイノセントな子供たちの群れに違和感なく融け込んでいた。

東尾と本木が歩いていた。

「捜せつたってどうすりやいいんスかね」「野生のオオクワガタ捜すよりはマシだろう

「いやあ、どつこいどつこいじやないですかね」

「前金貰つちまつたし格好はつけなきやな」

本木は勿論、東尾も当てはなかつた。

「どうする？」

奈津樹だった。

「カップル喫茶でもいくか？」

「何アンタそういうシユミあんの？」

「ねえよ」

双方、ふと相互に相手側を視認した。どちらも然るべき反応を示すまでに一拍あつた。元春と奈津樹は左に向かつて駆けだした。東尾・本木ペアもそれに呼応した。

通行人たちの挙動に秩序はなかつた。流体の分子運動さながらに四方八方に動き回っていた。

元春と奈津樹が猛然と突つ込んでくる。す

んでのところでファイジカル・コンタクトを避け得た者もあれば敢えなく衝突される者もあつた。

元春と奈津樹は愕然とした。前方を歩いていた奈津樹と連れの男が俄に左に転回して駆けだした。不意打ちを受け止めてい

る間に、奈津樹たちに対向してきた二人組が奈津樹たちを追い掛けはじめた。取り敢えず、麻宮も参戦せざるを得なかつた。

元春と奈津樹の進行方向に横断する大通りがみえた。片側四車線計八車線の大通り。その大通りが擁する巨大な横断歩道の歩行者信号は点滅をはじめていた。元春たちが手前に至る寸前に赤になつた。左右には信号待ちに苛立つた車の横列だ。

元春は奈津樹の腕を引っ張り、無数のエンジンが手ぐすねを引いている渦へ突っ込んだ。元春は疾走しながら怒声を発していった。

待ちかねたスタートの合図にブレーキペダルを弛めるやフロントガラスの端に障害物が割り込んできた。ドライバーは粟を喰つてブレーキペダルを踏み直す。ブレーキングが大通りを搖るがす。針の筵の上を元春と奈津樹は駆け抜けた。

元春たちに続こうとして、走行をはじめ

た車輛に進路を塞がれた東尾と本木は立ち往生せざるを得なかつた。千載一遇の好機が逃げ去つてゆくのを車間より垣間見た。

東尾は傍にあつたドラム缶ほどの大きさのゴミ箱を持ち上げた。本木は反応できなかつた。東尾は持ち上げたゴミ箱を力任せに大通りへ投げ込んだ。重量のゴミ箱が緩やかに放物線を描いて大通りの中心に落ちた。

至近距離にあつた車輛が鼻先に降ってきたゴミ箱を避けられるはずもなく、虚ろな金属音とヘッドライトのケースが割れる音が街頭に駆けた。ゴミ箱は楔の役割を果たして円滑な交通を妨げ、耳を聾する音圧のクラクションの不協和音が爆ぜた。

騒然とする場から東尾・本木が悠然と引き揚げるのを見届けてから、麻宮も、釈然としないまま、そこを離れた。

乱れた呼吸の重複はともすると生々しかつた。元春と奈津樹は、手頃なビルに飛び込み、

階段で六階まで駆け昇つた。人気はない。表の喧騒が嘘のようにおもえるほどの静寂に於いて、二人のピッチの早い息継ぎだけが聴こえる。

「ヤバかったな」

華奢な奈津樹はまだ応える余裕はない。

元春は煙草に火を点けた。奈津樹が手を伸ばす。元春は喫いさしを奈津樹に渡し、新しい煙草に火を点けた。

汗が引くと、蹠蹠としたものが一人を覆い尽くした。

東尾と本木が停めた車の車内で所在なく過ごしている。

「な」「はい？」

東尾の語り掛けに虚脱していた本木は我に帰つた。  
「お前が一攫千金かつさらつたらどうす

る?」

雑談だと判り、本木は構えを弛めた。

「そうっすね……」

そこで本木の言葉は中断した。ややあつて、  
続きを喋りはじめた。

「まずいいクルマ買つてキヤバ行つてフーゾ  
ク貸し切つて……そんなところかなあ」

「貸し切りか。若けえな」

「アニキならどうします?」

「マンション買うな。それで、いい加減スケ  
と籍入れてよ、真っ当に暮らせりや……」

本木は意外そうに東尾の横顔を眺めた。そ  
れに気付き、東尾は話を中断した。朗らかな  
表情を引つ込め、いつもの強面に戻った。

「あのガキ、今頃どこほつき歩いてやがん  
だ」

「もしかしたらもう新宿にはいないかも、で  
すね」

「やつぱりそうだよなー」

東尾は宙を仰いだ。

つと本木が息を呑んだ。

半年前だつたか一年前だつたか定かでは  
ない。あの夜、本木は、珍しく上機嫌だつ  
たオヤジから十万円の小遣いを貰つた。本  
木は、ネットを介して、売春をもちかける  
娘とぶつかつた。四肢のすらりとした少女  
だった。口数は少なく、無愛想だつたが、  
容貌は整つていた。

味気ない行為の後、一服しながら、喋つ  
た。

「オレ、深作一家なんだぜ」

娘は動じなかつた。本木が訝つていると  
それを見透かしたように娘は口を開いた。

「矢嶋さんは元気?」

本木は面喰らつた。

「矢嶋のアニキ識つてんのか?」

「客として、ね」

本木は面をあげた。

「アニキ」

「何だ?」

「渋谷、張りましょう」

「あ？」

「あの小娘、渋谷を根城にしてるはずです」

すんでのところであの二人組がぶち壊してくれた。お陰で、また気長に発見を待たねばならなくなつた。二人組の素性は不明だが、利害が対立することは明らかだつた。

麻宮は電話で五代に一頻り芳しくない経過について報告してから、思い切つて、進言した。

「もう諦めませんか？」「カネなら払う」

皮肉にも麻宮の進言が呼び水となり、それから延々と五代の演説を聴かされる羽目になつた。五代は如何に命運が懸かっているかについて捲し立てた。

通話を終えて、麻宮は、やれやれとかぶりを振つた。

元春と奈津樹は昼食を摂りに出掛けた。通りに面した店舗のガラスをふと一瞥して奈津樹は歩を止めた。ガラスに映つた鏡像を覗き込み、眉間に皺を寄せた。

「吹き出物……やっぱ食生活だよ」

「トシじやねえの？」

元春は奈津樹の殺氣立つた眼つきに怯え俯いた。

「ここいらの食べ物屋は軒並み制覇しまつたんじやねえか」

「塩辛喰べたい……」「塩分多いぞ」

東尾と本木は、車を有料駐車場に停めて、虱潰しに元春と奈津樹の行方を探すつもりで、渋谷を巡回してみた。だが、暑さにやられ、早々と音をあげて、駐車場を目指して歩いているところだつた。

ランドマークたる巨大な円柱の麓でアイスキャンディの屋台がビーチパラソルを拡げていた。

「俺が車回すから、お前アイス買つてこいよ」

東尾と本木は、一旦、別れた。

屋台の売り子はビキニとホットパンツといいでたちで本木は思わず歓声をあげそうになつた。

「ふたつくれ」

「かしこまりました」

嬌声に、またしても本木は鼻の下をのばした。売り子が包装に取り掛かった。手持ち無沙汰で、ふと本木は右手に伸びた坂の方を見た。手前へ向かって歩いてくる一組のカップルの姿が眼に映つた。視線が衝突しそうになり、見切りをつけようとした。つと思いとどまつた。

元春と奈津樹だった。

本木の反応を察知し、元春と奈津樹は躰を

翻し脱兎の如く駆けだした。一拍遅れて、本木もスタートを切つた。

巨大な円柱は幹線道路を二分する三角州のような土地に建つていた。東尾は、巨大な円柱の通りを挟んだ向かいにあるファミレスの駐車場に停めた車の中にいた。

元春と奈津樹は決して樂とはいえない坂を逆走する羽目になつた。本木は長い髪を振り乱し、猛然と二人の背中を追つた。本木の背後に取り残された売り子が立ち尽くしていた。

元春と奈津樹が必死の形相で舗道を駆け上がつていると不意に脇から通行人が割り込んできた。二人の進路の延長線上だつた。元春は強行突破を目論んだし奈津樹も同意見だつた。突っ込めば通行人の方が躱してくれるだろう。だが、あるいは元春よりも長身かもしれない男は舗道の中央から退こうとしなかつた。

元春と奈津樹はたらを踏んで立ち止

まつた。二人とも、無関係な通行人ではないと勘づいた。案の定、立ち止まると、如実に反応を示した。元春たちの勘は正しかった。

通行人とは麻宮だった。

後ろからは本木が迫ってきていた。麻宮も前進をはじめた。元春と奈津樹は目配せを交わすが早いか車道へ向かつてダイブした。車輌の流れが途切れていたわけではなかつた。

本木も麻宮も意表を衝かれ、脚が止まつた。

車道に転がり込むや目前にシーマが迫つていた。二人とも眼を瞑つた。クラクションとスキッド音が耳朶を打つ。二人揃つて絶叫した。

果たしてシーマは、その鼻先でセンターラインを割つて、停止した。

恐る恐る眼を開けた元春と奈津樹は安堵の溜め息をついた。

だが、安堵も束の間、ドライブアード激昂して降りてきた。

元春の貌に光がさした。奈津樹に目配せを

送つた。

怒れるドライバーが駆け寄ってきた。元春は相手の前へ進もうとする運動を逆手に取つて、ドライバーを押し倒しまドライバーアーズシートに駆け込んだ。助手席のドアロックを外した。須臾の目配せの意味を汲んだ奈津樹は助手席側に回り込んでいた。

制止しようとする持ち主を置き去りにシーマはUターンして坂の上めがけて発進した。

まだローン残つてんだよお  
持ち主の悲痛な叫びが駆け込んだ。

本木も麻宮も急転直下の事態にまごついていた。それぞれにシーマの停止位置で善後策を考えあぐねていると、至近距離でスカイラインが急制動した。東尾だつた。本木を乗せるとスカイラインはホイルスピンドルをさせながら発進した。

麻宮もBMWへ戻り強引なUターンを敢

行した。非難のクラクションが飛び交つたが、アクセラレートして振り切った。

映っていた。

元春は我を喪つたように雄叫びをあげながら交差点に突入していくつた。

東尾も麻宮も元春に倣つた。

俺まだ死にたくないつス

本木が絶叫した。

しばしば対向車線に割り込みながらシーマが疾駆してゆく。対向車線を走行していた車輌は路肩への退避を余儀なくされる。シーマは先行車輌を次々と追い抜いてゆく。

加速度によつて躰がシートに押しつけられる。一台抜けば、また直ぐに次の先行車輌のリアが迫つてくる。元春は吼えながらステアリングを操舵する。奈津樹はダッシュボードに腕を突つ張らせ躰を固定している。

後発のスカイラインもBMWも、元春の驅るシーマ同様の傍若無人な走行で、シーマとの距離を一定に保つていた。

坂が終わろうとしていた。坂の涯てには大通りが横たわっていた。

信号は赤だつた。交通も途絶えてはいない。元春は焦つていながらもバックミラーを覗いた。やはり、スカイラインとBMWがしかど

至る所で急制動のスキッド音とけたたましいクラクションが起きた。衝突音とガラスの割れる音のコンビネーションも幾つかあつた。

巨大交差点は俄に修羅場と化した。信号無視のシーマとスカイラインとBMWだけが混乱に乗じて交差点を通過した。

シーマが首都高入口に進路を取ると、後続の二台も追随した。

料金所を突破したシーマがハイウェイへの侵入を果たした。シーマによつて引きちぎられたストップバーがアスファルトに転がり渴いた音を立てた。

東尾の驅るスカイラインが、トップの

シーマとの距離をみるみる縮めた。

遂にスカイラインがシーマに並んだ。

本木が窓越しに何やら喚き立てているが風  
が言葉をずたずたに引き裂いてしまう。元春  
が頻りに併走するスカイラインを横目で窺つ  
ている。どうやら焦っているらしい。

奈津樹が黙つて短銃を取りだし、事も無げに発砲した。スカイラインのフロントガラスに内側から命中し、一面に網目が掛けた。動転した東尾が操舵を誤つた。

「バカヤロー 軽いキモチで撃つんじやねえ元春の声は微かにだが震えていた。

「何？ブルってんの？」  
「いやそうじやなくて」

やはり奈津樹には敵わない。

スカイラインの躊躇に乗じて、BMWが挑戦権を獲た。麻宮はアクセルペダルを目一杯に踏み込んだ。センターライン上にとどまつていたスカイラインを避け、シーマの直後につけた。

躰を捩り後続を検めた奈津樹が猛追してくるBMWに気付いた。

「判つてゐる」  
先行していたシーマだが、彼我の距離は  
じりじりと圧縮されていった。

シーマとBMWは走行するレーンが異なっていた。いよいよBMWがシーマのリアに差し掛かった。麻宮は深呼吸をした。そして、大胆にステアリングを切った。

運動エネルギーの向きがぶれる。シーマは明後日を向いた。スピノルを始め、制御できなくなつた。シーマの車内に、元春と奈津樹の悲鳴が廻した。

ランチを終えたミルズ一行は、交差点に覆い被さるように架かった歩道橋に差し掛けた。歩道橋の上に更にハイウェイが架かっている。

「ケイトはチケツトの手配、俺とウイルは

荷造りと発送

ミルズの指示に、ケイトとウイルが同時に返事をした。

宿舎まであとすこしだつた。

シーマは中央分離帯と側壁の間を編み上げるような軌道を描いた。軌道が錯綜し複雑に絡まり解けなくなつて漸く静止した。側壁に接触していた。それに伴い、麻宮のBMWも停まつた。

草臥れて元春と奈津樹がシーマから降りてきた。麻宮もBMWから降りた。

逃げるには高速道路は不利だつた。しかも高架になつた高速道路だ。元春と奈津樹が立ち往生しているうちに、サングラスの麻宮が歩いて近づいてきた。

「だから、誰だよ」

やはり麻宮が敵であることは間違ひなかつた。

「知るわけないじやん」

奈津樹は銃を持つてゐることを思いだし銃を抜こうとした。だが、麻宮が隠し持つていたスパナを投げつける方が早かつた。

奈津樹が反応した隙に麻宮は急接近した。間合いを詰められ、銃を抜くに抜けなくなつた。元春と奈津樹は後ずさりした。背後には側壁が迫つていた。側壁の向こうは宇宙だ。高速道路の下をのべつまくなしに車輛が行き交つてゐる。麻宮の歩みに押され、

元春と奈津樹はとうとう壁際まで追い詰められた。元春は苦し紛れに背後を一瞥した。見切りをつけようとして、微妙に表情が変化した。奈津樹は目敏くそれを認め、自らも元春に倣い背後を覗いた。奈津樹の貌で疑問が氷解した。

麻宮が徒手で襲いかかることのできる位置に到ると同時だつた。

元春と奈津樹は不意に身を翻し躊躇うことなく側壁を飛び越えた。

足腰が悲鳴をあげた。或いは鱗ぐらいは入っているかもしれない。

元春と奈津樹は、高架下を通る幹線道路の交差点を覆うように掛かつた歩道橋にいた。元春らが飛び立った地点は高速道路と歩道橋とが立体交差していた。

頭上を仰ぐと、麻宮が身を乗り出していた。愕きと焦りの色が窺えた。騒ぎになつた以上、引き下がらざるを得なかつた。それに事故処理の連中が到着する頃だつた。麻宮はBMWへ駆け足で戻つた。

歩道橋の歩行者らは立ち止まつて空から降つてきた元春らをしげしげと見遣つていた。元春と奈津樹は気恥ずかしさを覚えた。

なにみてんだよ

奈津樹が吼えた。気恥ずかしさを吹き飛ばすためだつた。観衆はそそくさと元春らから眼を逸らし歩きはじめた。但し、観衆の一部は例外だつた。

その歩道橋は俯瞰すると四辺形だ。元春らが着地した辺を下辺とすると、その一団は下辺から上辺に向かつたときに下手となる辺を下辺に向かつて通行中だつた。白人男女と浅黒い肌の男から成る三人連れの外国人だつた。奈津樹が怒鳴るまでの間、三人は元春らと高架を幾度も見比べては会話を交わしていた。どうやら驚嘆しているらしいことは窺えた。奈津樹の一喝で、周りの人々が歩行を再開した。彼らも足並みを揃えようとした。白人の男女は歩きはじめたが、二人の後ろにいた巨漢の黒人だけが立ち止まつたままだつた。スーツだがノータイの白人の男とシルクのブラウスをラフに着こなした白人の女が連れの黒人の挙動に気付き訝つて声を掛けた。黒人は独り言のように何やら呟いた。その一言に、白人の男女は弾かれ、元春らを振り返つた。一拍あつて、三人とも駆けだした。三人の外国人とは、宝石店に強盗に入り五代邸に侵

入した彼らだつた。

正体不明の追つ手をまき、虚脱しかけたとき、元春たちの視野の端で物体の目覚ましい挙動が発生した。三人連れの外国人が一斉に駆けだした。彼らの視線はまっすぐ元春らに向かっていた。三人連れの外国人は尋常ではない気迫を放射していた。元春は奈津樹の手を引つ張つて逃げだした。

なに

意表を衝かれ、奈津樹の声は上擦つていた。  
「とりあえず逃げるぞ」

やはり外国人三人組は四辺形の下辺に移動してきた。やつと奈津樹も事情を呑み込んだ。元春と奈津樹は転がるように階段を駆け下りた。バスターミナルを横切り、ガードレールを乗り越えた。ミルズらも同様のコースを探つた。

駅構内は利用客の群れが滞留していたが、

追われる者に謙譲のゆとりなどなかつた。

元春と奈津樹の強行突破により場が騒然となつた。不運にも元春と奈津樹の行く手に位置した客のうちの一部は跳ね飛ばされ転倒する者もあつた。悲鳴や怒号が飛び交う。騒ぎを聴きつけた駅職員が駆けつける。元春と奈津樹は衆目を意に介さずに改札を飛び越えて、勢いを弛めずにホームへの階段を駆け昇る。元春・奈津樹ペアによる攪乱の波紋が収まらないうちに今度は外国人三人組が突っ込んできた。制止を試みた駅員だが、容易く跳ね飛ばされ、果たして利用客に介抱される羽目になつた。

階段をクリアし、ホームに遭遇した。やはり強行した。危険を顧みず突つ切り、最前線に至つた。

先頭車両がホームの端に差し掛かっていた。さすがの元春と奈津樹もこれには躊躇つた。だが、代替案はなかつた。

ミルズたちがホームに辿り着くや、ホー

ムに居合わせた人々の間からどよめきが起つた。

線路上に着地した元春と奈津樹をものともせずに電車が近付いてくる。ミルズが火器に手を伸ばした。ケイトとウイルは慌ててミルズを制止した。

元春と奈津樹は、跳んだ。殆ど同時に着地点に電車が駆け込んだ。

対向線路との間に設置された変圧器コンテナ群の隙間で、元春と奈津樹は絡まっていた。至近距離で線路の軋む音を聴いた。電車が停まるか停まらぬかの間に、対向線路に這い出て、反対側のホームによじ上った。利用客たちが反応できないでいるうちに、雜踏に消えた。

広い葉を蓄えた椰子の木の裾に、デッキエリアに躰を横たえた奈津樹の姿があった。奈津樹は、遠浅の海を背負っていた。海水は陽光を濾過し自らの裡でそれを攪拌し見惚れるほどの綾を紡ぎだしている。

偏光グラスを掛けた元春が波打ち際で波と戯れている。スロットに出掛けるときと大差のない服装だ。玩具の銛を掲げ、波がくる度に一々歎声をあげている。

奈津樹はといえば、デッキチエアの上で微睡んでいる。普段は呑まないやたらとフルーツが添えられたカクテルがテーブルに飾られている。脱ぎ棄てられたミュールが芝生に転がっている。眠りに堕ちなつた。すると、元春の歎声が奈津樹を喚びました。

太陽の勢力は依然として烈しいものの、空気がいい具合に乾いていて、過ごしやすい。頭上に拡がる蒼穹は、遮られるものがなくて果

うるせえ

元春が振り返った。だが、距離があり、

てしがない。その色は明澄で清冽で眼に染みた。

元春は奈津樹の表情までは読みとれなかつた。

オメーもこいよ

奈津樹は、癪癩を起こそうとして、止めた。

元春の邪気のなさにすっかり毒氣を抜かれてしまつた。カクテルを一口呑んで、元春の許へ歩いていった。

潮騒を伴つて波が押し寄せてくる。見渡すかぎりの白い帶は壯觀だ。元春も奈津樹も固唾を呑む。ややもすると、潮騒が耳を聾するくらいになつた。遠目ではさほど速くみえなかつた波だが、指呼の距離ではそれが錯覚だつたことを如実に示した。

元春と奈津樹は飛びすさつた。波頭は空を切り力を失い跡形もなく粉碎して砂に呑まれていつた。

元春はもとより、奈津樹も柄にもなく無防備に貌を綻ばせている。

辛くも渋谷を脱出した元春と奈津樹は、沖縄に潜伏していた。当てがあつたわけではない。二人が羽田空港に転がり込んだとき、出

発時刻が最短だつたのが沖縄だつた。

引き続き、二人は波打ち際での遊戯に

耽つていた。

沖で次の波が萌した。元春と奈津樹は後退した分だけ前進した。いつか、どれだけ波を引きつけられるかに趣旨が変わつていた。喧しい潮騒が忽ちにして辺り一帯を席巻した。横に列んでいた元春と奈津樹が反応した。元春は首尾よく避けた。だが、奈津樹はといえば、波頭をすんでのところまで引きつけたはいいが、退却の時機を見誤つた。足をとられ、無様に尻餅をついた。

奈津樹を放つて、波が後退していつた。

元春が嘲り笑う。奈津樹はばつが悪そうにのろのろと起ちあがつた。

次の波が迫ってきた。奈津樹は元春の無防備な背中に体当たりした。バランスを崩された元春も海の触手に強かに叩かれた。元春の情けない悲鳴が閑散としたビーチに研した。奈津樹は勝ち誇つたような笑みを

元春にみせつけた。

「だとすると？」

「命しらずの猛者どもが血眼になつてうち  
らをトリにくる？」

「深作組の二人組は当然だとして」

「ふと元春が切り出した。宿舎に戻り、くつ  
ろいでいたところだった。元春はベッドの側  
面に凭れていて、奈津樹はベッドの上で壁に  
凭れている。

「あのでけえオッサン、それにあの三人組は  
何なんだ？」

「仲間？」

すこし勘案して、奈津樹が答えを口述した。  
「あの三人組は歩道橋に飛び降りんのを待つ  
てた？」

「かもね」

元春が腕組みして悩みはじめたから、奈津  
樹は慌てて打ち消した。

「な、わけないじやん」

元春は己の至らなさに項垂れた。

「懸賞金でも懸けられちゃつたのかな」

コストパフォーマンスに重きを置いた結  
果、形成された密に配された座席が窮屈な  
空間でひしめきあつていて、乗車率は九〇  
パーセントを超えていて、人いきれを搔き  
消そようとエアコンが忙しく稼働していた。

「おいこれなんだ？」

東尾が隣の本木に訊いた。東尾が手にし  
ていたのはイヤホンだった。それを見て、  
本木も腑に落ちないという反応を示した。  
「……鼻の穴に差し込んだら酸素が供給さ  
れたりするんじやないすか？」

東尾は表情を氷解させた。

「こうか？」

機内の彼方此方で忍び笑いが漏れ、キヤバン娘はだしの演技力を誇るフライト・アテンドントが品よく東尾の間違いを指摘した。

「バカヤロウ」

東尾は頬を紅潮させて本木を小突いた。

機首側から顧みて、東尾と本木の席は下手窓際だったが、その席の右奥に麻宮が位置している。腕組みして仮眠している。サングラスがアイマスクの代わりらしい。その隣席では、五代が貧乏搖すりをしながら爪を噛んでいた。こうしている間にも利子は膨らみ、状況は悪化してゆく。いてもたってもいられなくなり麻宮についてしまったものの、正しい選択だったのかという疑問が頭を擡げてくる。

機首を横断するカーテンを潜り抜けると、座席の密度が低くなつた。カーテンの手前までの座席の並べ方は映画館やスタジアムのそれだつたが、こつちは高級ホテルのラウンジさながらだつた。

セレブ気取りの乗客が多い中にあつても、一際派手な身なりをした、フライト・アテンドントにやたらと注文をつけている女がいた。外見に華があり、女優と見紛う者もあつた。綾香だつた。

綾香から離れた位置に座つた白人が母国語で乗務員を執拗に誘惑していた。乗務員が困惑するのを見かねて、連れが白人を奢めた。ミルズとケイトだ。ウイルは瞑想でもいるかのようにイヤホンより出力されるブラック・ミュージックに聴き入つていた。

「延長の費用は自腹だよ」

ミルズの通話相手はそう念を押した。  
「判つてるさ。ギヤラと相殺だ」

「君たち信じているよ」

「感謝する。いいニュースを期待していてくれ」

「神のご加護があらんことを祈る」

ミルズは通話の内容を思いだして、肘掛けに拳を打ちつけた。

「吝嗇家が」

いつか貌つきが険しくなつていた。

二分された区画の一方にはハブが、もう一方にはマングースが収まつていた。どちらも戦意がないらしく、互いにそっぽを向いている。

ハイビスカスが気持ちよさそうに風に揺らいでいる。ハイビスカスの彼方で、元春と奈津樹が沖縄そばを頬張つている。

食後、一服しながら、元春が独りごちた。

「沖縄に棲みてえ」

「いいかも。日焼け止めバカにならなさそうだけど」

係員の前口上が続いている。  
「まだかよ」

ミルズが独りごちた。ミルズの隣ではケイトとウイルが塩煎餅を頬張つている。咀嚼が耳障りで、ミルズが制した。ケイトとウイルは不承不承、塩煎餅を喰べるのを中断した。

満を持して、間仕切りが引き抜かれた。観衆の間に緊張が駆け巡つた。ハブが鎌首を擡げ、マングースが牙を剥いた。

叫喚が爆ぜた。

マングースの前足が真一文字に一閃し、ハブは頭部と胴体を分断された。子供や気弱な大人は怯んだ。

テントの陰に、疎らだが、ヒトが集まつていた。人々は、言葉を慎み、興味津々の体で、一箇所に注目している。ベンチに、ミルズはじめとする三人組の姿もあつた。ミルズたちも周囲に倣つていた。

果たして衆目を集めていたのはゲージだつた。間仕切りによつて二分されたゲージだ。

ケイトは驚嘆の声をあげたが、ミルズは眼を覆つた。

「なんて残酷なんだ」

ミルズはかぶりを振った。ケイトとウイルは項垂れるミルズを見て頸を傾げた。

ソファに腰掛け麻宮を待っていた五代と共にエントランスを潜つた。

二人の乗つた車が湾岸道路を駆け抜けてゆく。

フロントに現れた来客にいつも通りに応対した担当者は、警察手帳を提示され、貌を強張らせた。警察手帳に次いで、二枚の写真が提示された。写真にはそれぞれ元春と奈津樹が映つていた。

「見覚えありませんか」

意志の強さを感じさせる低い声だつた。担当者が改まつて写真に見入つた。ややあって、担当者が面をあげた。

「記憶にございません」

来客は嘆息し写真を引つ込んだ。

「名刺をお渡ししておきますので、見掛けたら名刺の番号にご連絡ください」

当惑している担当者に名刺を押しつけて踵を返したのは、麻宮だつた。麻宮はロビーの

砂浜には、延々と足跡が連なつていて、いまなお軌跡を曳きながら、東尾と本木が海から遠離つてゆきつつあつた。苛烈な陽射しとじわりじわりと体力を奪う砂場に、二人とも辟易しているかのようだつた。砂混じりの潮風がアロハの裾を棚引かせ、本木の肩の辺りまである髪を乱した。

「まつたくいいご身分だぜ」

東尾がさも忌々しそうに吐き捨てた。

東尾と本木の足跡を海側へ辿つてゆくと、果たしてビーチパラソルの下で綾香がデッキチェアに躰を横たえていた。東尾と本木はまたしてもブースを設営させられる羽目になつた。

「社会人つてツライつすね」

本木が愚痴を零す。

「あの業界にリストラはねえっておもつてたんだけどな」

東尾と本木は肩を落としてとぼとぼと歩き続けた。宿舎に戻り、レンタカーを取りに行かねばならなかつた。

元春は眠りから醒めるとテラスへでた。丘の麓がビーチを擁する海で、テラスから見渡すことができた。

煙草に火を点ける。のびをしながら、元春ははつとした。丘の彼方に人影を認めた。見る見るうちに全身像が顕わになつた。東尾と本木だつた。

東尾と本木も元春に気付いた。

元春は一目散に室に駆け込んだ。

「起きろ」

惰眠を貪る奈津樹の躰を揺さぶつた。  
「もう食べらないよお」

寝言を云つて寝返りを打つた。元春はや躊躇つたものの奈津樹の頬を張つた。案の定、奈津樹は猛獸のような反応を示した。

元春と奈津樹が大荷物を抱え、やつと廊下に這い出でた。右手の突き当たりで東尾・本木が元春と奈津樹を見付け踏鞴を踏んだ。元春たちは反対方向へ一目散に駆けだした。慌ただしい靴音と東尾の怒号が廊下を突き抜けてゆく。異変に、少なからぬ廊下沿いの室の宿泊客が遠慮がちに開けた扉の隙間から頸をだした。奈津樹が足を縛られさせ激しく転倒した。物音に足を止めた元春は奈津樹の名を呼んだ。東尾と本木が俄にピッチをあげた。起ちあがつた奈津樹と東尾が交錯した。制圧しようとする東尾に対し、奈津樹は身を捩り四肢を存分に使つて抗つた。苛立つた東尾が拳を放とうとテイクバックした。すかさず奈津樹が膝を曲げずに脚を振りだした。奈津樹の脛が

東尾の股間を叩いた。堪らず東尾は床に蹲つた。逃げだそうとした奈津樹に今度は本木が飛び掛かろうとした。

本木のすぐ眼の前でマズルフラッシュが閃き破裂音がした。銃口は本木の貌と平行だったものの効果は覗面で本木は真後ろにひっくり返った。元春は奈津樹の手をひつたくつて廊下の奥へ向かった。

元春と奈津樹は非常口を潜った。

ミルズたちは車で観光名所を巡っていた。とは云つても観光をしているわけではなく、元春たちの足取りを掴むのが狙いだつた。ミルズたちは、外来者が立ち寄りそうな地点を亂潰しにあたることにしたのだつた。

ミルズたちの乗つたボルボがどこまでも真っ直ぐに伸びた湾岸道路を行っている。ステアリングを握っているのはウイルだ。隣にケイトが、後部座席にミルズが座つていた。「あれ一個盗れなかつたら幾ら値切られるん

だらうな」

ミルズが誰にともなく話し掛けた。

「二五パーセントは固いんじゃない？」

ケイトが渋面をつくつて応えた。ミルズは眼もあてられないとでもいう風に貌を背けた。

「あの間抜けが厳重に管理しておけばこんなことにはならなかつたのによ」

「間抜け」とは恐らくは五代のことだろう。

「まつたくだ。やつぱりセキュリティは大事だな」

ウイルが納得したように二・三度ちいさく頷いた。

フロントガラスの上手に巨大なビルディングが聳えていた。ホテルだつた。車寄せから人影が飛び出してきた。男女の二人組だ。二人組は躊躇うことなく車輌の往来のある車道を割つた。

舌打ちして、ウイルはブレーキペダルを

踏み込みざま、クラクションを鳴らした。それでも二人組はフロントガラスに一瞥をくれるでもなく車道を横切り、下手の塀に到り、ひらりと乗り越えた。

ウイルも助手席のケイトも後部座席のミルズも、毒づいてから、二人組が他ならぬ元春と奈津樹だと認知した。三人が貌を見合わせたとき、麻宮がフロントガラスの前を横切った。

くつろいでいたミルズが俄に色めきだつた。それはあとの二人もまた然りだつた。後続車輛がクラクションを鳴らした。ミルズがドアを蹴り開け、ベルトに挟んでいた拳銃を抜き、間髪を容れずに発砲した。後続車輛のフロントガラスを蜘蛛の巣が覆つた。搭乗者のいずれも被弾はしなかつた。ミルズがすんでのところで照準を外した。搭乗者たちは愕きの余り表情さえ喪つた。ミルズはケイトに宥められると云わざもがなだと身振り手振りで小言を封じた。ミルズとケイトが元春・奈津樹・

麻宮が飛び越していった塀に縋りついた。

砂を蹴り上げながら海を目指してゆく三人の姿がみるみるうちに縮んでゆく。

ミルズとケイトはウイルの声に振り返った。

微酔いの綾香は陶然と波音に聴き入つていた。綾香が躰を横たえたデッキチエアの傍には折り畳み式のテーブルがセットされ、ドンペリプラチナのボトルが鎮座していた。ボトルはよく冷えていることを誇示するかのようにその表面にびつしりと水滴を付着させていた。

性悪とはいえ、その肉体は超絶だつた。交差した脚は細くて長く、胸許はたわわな乳房が覗き合い汲々としていた。サングラスによつて眼許が隠されているが、鋭角的な鼻梁や卵形の輪郭によつてその造作の程を推し量り得た。

うたた寝をしていた綾香がふと眼を醒ま

し身じろぎをした。遠い喧騒が聴こえたような気がして綾香は上体を捩つて愕然とした。

視界を塞がれたかと思いきや、砂の上に投げだされた。何者かが陸側から突っ込んできたのだ。綾香は立ち直り面を上げた。闖入者は一人ではなく二人で、転倒させた綾香に構わず海を目指していた。片割れの後ろ姿に見覚えがあった。起ちあがろうとしたとき、やはり日本人離れした体躯の持ち主が綾香を踏み倒した。綾香はまともに浜に貌を埋めさせられた。激昂して起きあがろうとしたときだつた。

綾香の傍で爆発が起きた。ビーチに爆轟が爆ぜ、砂が垂直に迸り、東尾らが泣く泣く設営したキャンプが木つ端微塵になつた。綾香は数メートル吹き飛ばされたものの生命に別条はなく意識も確かだつた。

砂に足をとられながらも元春たちはひたら駆けた。

「何で海目指しちゃつたんだよ」「識るか」

振り返れば、首都高でBMWから降りてきた麻宮がストライドを活かした走りで死に物狂いの追いあげをみせていた。

砂が間怠つこかつた。もどかしさに苛立ちつつも前進する他になかった。元春が自らを鼓舞するために咆吼をあげたとき、綾香のキャンプが砲撃に遭つた。逃げる元春も奈津樹も追う麻宮も思わず立ち止まり音源を振り返った。轟々と砂煙がたちのぼり、辺りにいた者は皆、砂を被つた。

「サイマー」

奈津樹が頭部や肩に降り掛かった砂を手で払いながらぼやいた。その声に、元春も麻宮も我に帰つた。当事者たちは慌ててレースを再開した。

波打ち際が目前に迫つてきていた。元春も奈津樹も苦渋の色を滲ませていたが、その貌に俄に精気が再燃した。

波打ち際で一台の水上バイクがアイドリングしていた。ライダーは波と戯れる水着姿の女の子をナンパしているところだった。

元春と奈津樹が砂の濡れた境界に足を踏み入れた。元春がシートに跨っていたライダーを突き飛ばし代わってシートに跨った。慌て

ふためくライダーを余所に奈津樹もシートに着き元春の背中にしがみついた。麻宮が肉薄してきていた。

麻宮がダイヴした。滯空している僅かな隙に水上バイクは水飛沫をあげながら、沖へ発進した。

「畜生」

珍しく麻宮が激し一掴みの砂を足許に叩きつけた。

「先回りよ」

いち早く善後策を採択したケイトがミルズとウイルに呼び掛けた。三人は一齊に車へ戻

るべく踵を返した。車に戻る途中、ミルズがランチャーを引つ提げたウイルを見て、云うことを思いついた。

「ミサイル代はお前持ちだからな」  
ウイルはミルズの言葉に弾かれて立ち止まつた。

「そんな殺生な……」

ウイルが巨体を震わせてぐずりだした。  
演技ではなく、泪ぐんでいた。ドアを開こうとしていたケイトが見かねてウイルの傍まで引き返ってきてウイルの手を引つ張つた。

「判つた。ミサイル代は折半ね」

ケイトはウイルを宥めてからミルズに快諾を迫つた。

「異議なし。ウイル、俺が悪かつた」

ウイルは拳で涙を拭いながら頷いた。  
こうした糺余曲折を経ながらも、三人は追跡を再開することができた。

元春と奈津樹が浅瀬を移動している。小走りに陸へと向かってきている。背景の片隅に乗り捨てられた水上バイクが見える。二対の

脚が、水音を立てながら、忙しく交差を繰り返す。海を渡つた二人は随分と海水を浴びていたが、じきにこの陽射しに乾くだろう。

浅瀬は底が透けて見えて、沖へ近付くにつれ青みを帯びている。真綿のような質感を醸す入道雲が天空を衝いている。陽光の眩さも手伝つてゐるのだろうが眼に映るもの全てが色鮮やかだ。

汗と海水に濡れた二人の躰が陽光を弾く。

二人とも切羽詰まつた様子で黙々と陸を目指している。周期的に押し寄せる波が足を掬いに掛かる。二人ともいささかの体力を消耗しながらもそれに堪えた。

早く小休止したかった。だが、障害物が一切ない砂浜では、それは能わなかつた。へたり込みそうになるのを堪え、先ずは砂浜から

の脱出に努めた。だだつ広い砂浜を往く二人の姿は、遠目には米粒ほどの大きさでしかなかつた。

東尾と本木が地上に降りてくると、首都高でニアミスしたBMWの男が、連れの男の車に乗り込むところだつた。麻宮は、東尾と本木の視線に気付いて一瞥したが、そのまま乗車した。麻宮を乗せるとシーマは直ちに発進した。

東尾と本木はふらふらとホテルの車寄せから公道にてた。シーマが遠離つてゆく。停まつたままの傍の車はフロントガラスに被弾している。元春と奈津樹の姿はどこにも見当たらない。途方に暮れていると、雄叫びが聴こえた。

上背のある脚の長い女が猛然とこっちへ向かつてきつつある。綾香だ。大女が絶叫しながら奔る様は悽愴ですらあつた。東尾

と本木は、二人で設営したキャンプが跡形もなく消滅しているのに気付き、貌を見合わせてから、頸を傾げた。綾香が、その表情を視認できる程度の位置に達した。東尾と本木は、いまそこにある危機に勘付き、逃げようとした。だが、遅きに失した。

「何逃げようとしてんの」

綾香が二人の首根っこを両脇でホールドした。哀れな東尾と本木が応えに窮していると、綾香が言葉を継いだ。

「車回して。逃がさないから」

「その前に……放して……くれ」

「鍵を貸して」

「差し出した。」

「デートの邪魔してごめんね」

対岸に辿り着いたミルズ一行は、乗り捨てられた水上バイクを発見し、一旦、降車した。  
「まだそう遠くへは行つていない筈よ」  
ケイトのテーゼをミルズもウイルも否定し

ない。

ケイトはふと辺りを見回した。路肩に一台のバイクが停めてあつた。ライダーは連れとともに防波堤に腰掛けて会話に興じていた。ケイトの様子が俄に一変した。

「手分けして捜そうか？」

ケイトはミルズとウイルにそう云い遺すと、徐にライダーと連れに近付いた。

氣配に振り向いたライダーの鼻先にハンドガンの銃口を衝きつけた。ライダーは茫然とケイトの貌を仰いだ。

「鍵を貸して」

ケイトはウインクしてみせた。その微笑みは妖艶だった。ライダーは大人しく鍵を

ケイトはスロットルを捻りざまにクラッチを繋いだ。それと前後して、ミルズとウイルの乗った車輛も発進した。

ライダーとその連れは、終始、狐に抓ま

れたような様子だった。

漸く小休止にありつけた元春と奈津樹は、

どちらかが云いだすともなく、自動販売機で缶ビールを購入した。地べたに座り込み、栓を抜く。二人は所作ははからずもユニゾンになっていた。同時に、缶を煽った。喉を鳴らして嘔下する。溢れたビールが口の周りや服を濡らしたが敢えて構わなかつた。息をつくのも同時だった。

「うめえ」  
声が同期したことに、貌を見合させた。

「これって映画だかドラマだかで見たことある」  
姿が垣間見えた。

奈津樹はバード・パラダイスのことを云つた。汗だくの元春は奈津樹の言葉を聴き流した。

歩き続けていると、茂みで物音がした。思わず元春と奈津樹は足止めされた。  
進路を、ハブが塞いだ。

元春が怯懦に貌を歪める。奈津樹を圧し退けんばかりの勢いで元春が退却しようとしたとき、銃声が轟いた。

茫然と元春は奈津樹を見遣つた。銃口からたちのぼる煙を吹き消しながら奈津樹は「チキン」と元春の耳許で囁いた。

喧せ返るほどの薰りがたちこめている。ふんだんに鋭角があしらわれた原色の花弁の大群が風に吹かれて波打つていて。バード・パラダイスの花畠だ。見ようによつては昆虫の頭部に似ている。

元春・奈津樹が通り抜けたバード・パラダイスの花畠に綾香一行が現れた。彼らもやはりバード・パラダイスのフォルムに興味津々といった様子で自ずと歩度も緩んだ。

「これなんていう花だ？」

「判らないっス」「割とするんじやない？」

また、やはり途中でハブに襲撃され一悶着があつた。東尾と本木は互いに相手を囮に仕立てようとした挙げ句、一致団結して綾香を矢面に立たせようとした。

元々稀薄だった三人の信頼関係はより悲惨なものになつた。

屋根が低く短いトンネルは所々が崩落し、破れ目から光を探っている。地面は瓦礫が散乱していて歩き難い。腐蝕したトロツコの残骸や鉄屑が転がっている。トンネルの向こう側には雑草が繁茂していた。

トンネルの隣に、三階建ての建物があった。至近距離では見渡すことができないくらいの面積を誇っている。窓という窓はガラスを毀損されていて窓枠だけが律儀に縦横に整列していた。

その建物の裏手に回るための階段は巨大で、一度に多くの人間が離合することができた。階段を昇り詰めると建物の二階すれほどどの高さに達した。

径なりに進んでゆくと、右手に作業場と思しき建物の跡地があつた。壁は粗末な造りだつたらしく綺麗さっぱりなくなつていて、だつたらしく綺麗さっぱりなくなつていて、いたが、胴回りのあるコンクリートの支柱は健在だった。サツカーブらいはできそうな

帶びている。

ほどの広さだ。床は埃が降り積もつていて、所々で草木が生長していた。

クレーンのレールだつたのだろうか鉄骨が組まれている。鉄骨の筋交いが編み上げられているかのように見える。二本の支柱の間に掛けた鉄骨の側面に四枚の看板が掛けられて、安全第一と読めた。

パイプラインが敷地を這つている。全体的に鋸が酷くて表面を覆い尽くさんばかりに蔓が纏繞している。

廃墟は整地の手間を省いたのかアップダウングが激しく、どのオブジェも遠近感が可笑しくなるくらいに巨大であることと相俟つて、歩くだけでも意外と体力を要した。

湖ほどの大きさのクレーターが蟻地獄のように口を開けている。すり鉢の底に一輪車や鶴嘴が打ち捨てられている。クレーターの傍には、堆いボタ山があつた。

水のない貯水槽はどこか間が抜けていた。公園のプランコは片方の鎖が切れ地面に墜落

している。風が吹く度に砂塵が舞い敷地を取り囲む木々の葉擦れが十重二十重に響きあつた。

敷地の一画は団地となつていて、団地の外壁はいずれも黒ずみ、苔生していた。ベランダや階段の柵もやはり朽ちかけていて、触れただけで粉々に碎けてしまいそうだった。

団地の狭間から、海が覗いた。

元春と奈津樹は、敷地の門のように佇む低くて短いトンネルに差し掛かった。

「崩れてこねえかな」

逡巡する元春を余所に奈津樹はさつさと歩を進めた。元春も恐る恐る奈津樹に倣つた。足許は障害物で埋もれていて、一步進む毎に足場に気を配らねばならなかつた。

元春はおのぼりさんのように頻りに辺りを見回しながら歩いていてコンクリート塊に躊躇かけた。

奈津樹は埃にまみれた髪が頃や肩を撫でるのが煩わしくて、苛立ちの滲む手つきで髪を払い除けた。

点在する屋根の破れ目から陽光が射していて、幾条もの光の錯綜が綾をなしていた。トンネルの裡は、心持ち空気が冷えているようだつた。傾斜した大地を辿つてきた二人には、一服の涼を与えた。二人の影絵は、トンネルの出口で逆巻く光のフレアに呑み込まれてしまいそうだ。二人揃つてピンスポットの当たる場所で立ち止まり、トンネルの破れ目から、太陽を睨んだ。

盗んだバイクを駆つてケイトは反時計回りに湾岸道路を移動していた。ブロンドが自らが創りだす風に靡く。攻撃的な横顔は、アングロサクソンが狩猟民であることを否応なしに思い出させた。

ケイトの右側では、散乱した太陽の破片が海面の褶曲によつて生あるもののように蠢いていた。

コーナーに差し掛かつてはケイトはプロレーサー顔負けのコースどりを披露した。そのコーナーを抜けると、タイムを縮めるには恰好の直線だつた。スロットルを握ろうと色気をだしたとき、左前方に位置する丘の斜面に異物を見付けた。咄嗟に加速を中断し、斜面を注視した。鬱蒼と生い茂る草木の間を移動する影が垣間見えた。ケイトはブレーキこそかけなかつたもののスロットルは完全に戻して、眼を凝らした。標的に間違ひなかつた。

慣性によつて走行していたバイクの車体が翻つて急制動した。ケイトは、丘を登る元春と奈津樹から眼を離さないようにしながら、ポータブル通信機器を用いて仲間に連絡を取つた。

元春と奈津樹は、短い割には悪路のせいでも移動時間のかかるトンネルをやつと抜け

た。正面に崖が立ちはだかり、右は塗装の剥げた金網でその向こうは宙だった。径は左へのみ伸びていた。そっちへ向き直ると、コンクリート造りの建物が群生していた。いずれも、老朽化していることや損傷が烈しいことから、現在は利用されていないことが判った。巨人族のための墓場のような様相を醸す眺めに、元春も奈津樹も思わず、足止めされた。美貌を見合わせ、互いに相手の意向をさぐろうとした。

物音がした。音源はトンネルの入口だった。複数の人影が先を争うようにして辿り着いたところだった。人数は三名で、いずれも自動販売機を優に超える上背だった。元春と奈津樹は緊張した。追っ手は外国人三人組に相違なかつた。

三人の間から怒号が発される。意味は判らなくとも友好的な呼び掛けではないことは明らかだつた。慌てて、元春と奈津樹は避難を開始した。

三つの銃口が火を噴いた。ミルズとケイトはオートマティックの拳銃だが、ウイルに到つてはショットガンだった。排斥された薬莢が地面のコンクリートに墜ちて虚ろな音を立てた。間一髪、外した。三人はそれぞれに悪態をつき追尾に取り掛かった。

重複した銃声の音圧に鳥たちが一斉に飛び立ち俄に天空が騒然となつた。丘の斜面にいた麻宮は遅れをとつたことを悟り渋面をつくつた。

「おい、待つてくれよ」

振り返ると、怯えた様子の五代が木にしがみついていた。麻宮の機嫌が、一層、悪くなつた。

元春と奈津樹が建物に逃げ込むところを目撃したミルズは持てる膂力を惜しげもなく発揮し目覚ましいスタートダッシュをみせた。ケイトもウイルも置き去りにされた。

ややあつて、ミルズが元春と奈津樹の逃げ込んだ区画に到つた。

床面積が大きく、天井の高い建物だつた。

工場跡らしかつた。但し、壁は、損傷が烈しく、殆ど現存しない。コンクリートの柱が等間隔に列んでいた。

元春の視界に飛び込んできたミルズが映つた。元春も駆けだした。

柱の列を挟んで併走しながら、元春とミルズは撃ち合いを繰り広げた。けたたましい銃声が研し、火薬の匂いがたちこめる。二人のピッチの早い靴音は恰もタップを踏んでいるかのようだつた。ミルズは二挺の拳銃を片手ずつに握り乱射した。元春も応戦した。灼けた銃弾が元春やミルズを掠めコンクリートを毀し砂煙を噴かせた。

やがて柱が尽きた。元春は隣接する小屋の裏手に駆け込んだ。ミルズは踏鞴を踏んで立ち止まり、小屋を睨んだ。小屋を挟んで、膠着状態に陥つた。迂闊な行動が勝敗を分ける。

さればとて静止していてはならない。元春もミルズも息を殺して戦局に集中した。

トンネルを抜けて最初に待ち構えるビルディングの隣にある幅のある階段を、麻宮は五代を連れて昇りつつあつた。努めて足音を立てぬようにして、一段また一段と昇り詰めていった。

頂と目線が一致するかせぬかのところで、麻宮は立ち止まり上体を屈め、後続の五代を制止した。次いで、じりじりと頭を擡げ、頂の状況を窺つた。

メイン・ストリートは、階段に対して正面ではなくやや右寄りに伸びていた。径はメインストリートを除きふたつあつた。ひとつは、メインストリートの左側に立ち並ぶ低層建築群の裏手へ回り込む細い路地で、もうひとつは右手に真っ直ぐに伸びた径だ。

メインストリートの右側にケイトとウイ

ルがいた。ケイトもウイルも麻宮に對して背中を向けている。

麻宮は火器に手を伸ばした。だが、すぐに思いとどまつた。一人を撃ち倒したとて残る一人に銃撃されることに気付いた。方針を変えて、秘密裡に左の細い路地に潜り込むことにした。

階段を昇り切ると、敵の視界に入らぬよう、できるだけ低い姿勢のまま、路地を目指した。無事に死角への移動を済ませられそうだった。好事魔多し。電子音が静寂を破り、ケイトもウイルも敏感に反応した。五代の携帯電話の着信音だつた。麻宮に逆上している暇はなかつた。拳銃を乱射しながら五代を引っ張つて路地に潜り込んだ。死角に入るや、麻宮は力任せに五代を壁に圧しつけた。五代は麻宮の剣幕に気圧されまともに貌を上げることもできなかつた。麻宮は糾弾を断念し手を離した。

「先に行つてろ。今度ケータイ鳴らしたら間

違ひなく死ぬぞ」

五代は、小刻みに何度も頷いてから、出発した。

麻宮が眼を閉じて深呼吸をしながら拳銃を構え直す間に靴音が接近してきた。麻宮は、刮目するや、駆け出した。

ミルズが後方で鳴り響いた銃声に気をとられており隙に元春は駆け出した。我を忘れ、径なき徑を逃げ回つた。迂闊にも瓦礫に体重を掛けて転倒しそうになつたり崩れた塀のラフな断面で擦り傷をつくつたりしながら、展开了空間に到つた。

そこに巨大なクレーターガが口を開けて待つて受けっていた。サッカーコートの半分ほどの面積だ。深さは、むらがあり、二メートル乃至は三メートルといつたところだ。クレーターの底に、一輪車や鶴嘴やスコップが置き去りにされていた。クレーターのほとりに真っ黒な小山があつた。ボタ山だつ

た。

元春は、一旦、躊躇つたものの、選択肢がないことを悟った。渋面をつくつて毒づいてみせてから、クレーターの円周に沿つて奔りはじめた。汗だくの元春は全身、埃に塗れていた。背後から狙撃されれば一溜まりもない地形だ。元春は何度となく後方を警見しながら奔り続けた。

さほどの勾配ではなかつたが、ここまで運動量を鑑みれば、全く平氣だとは云い切れなかつた。

つと綾香が立ち止まつた。その気配に東尾と本木も足止めされ振り返つた。

「つかれた」

綾香が、口を尖らせて、どちらにともなく、訴えた。ミストーンのように場違いで胃に衝き刺さるような言葉だつた。東尾と本木は啞然としている。

「おぶつて」

東尾のこめかみの辺りに静脈が浮き上がりつた。いち早くそれを見て取つた本木が慌てて東尾を宥めに掛けた。

「アニキ、もうオレら、シロウトなんですから」

我を失いかけていた東尾だが、本木の差し水が功を奏し、貌から険がとれた。

「で、どうします？」

綾香はその意を汲めずに、さつさと移動をはじめた二人に慌ててついていった。

東尾は本木の云わんとするところが判ら

ないという仕草を見せた。本木は、目配せで、綾香のリクエストの件だと報せた。

「じゃあ、オメーおぶつてやれよ。若けえんだからよ」

「無理つすよ。オレ、都会のもやしつ子ですから。箸より重いもの持つたことないっす」

「何事も経験だ」

東尾は顎をしやくつた。本木は肩を落として綾香の許まで引き返した。本木が背中を差し出すと綾香がしがみついた。本木は起ちあがろうとはした。だが、志半ばにして、垂直に頽れた。

喚く綾香と悶える本木を眼にして東尾は力なく肩を落とし、溜め息をついた。

銃声を聴きつけてミルズが引き返してきた。  
何があつた？  
ミルズが大声を張り上げた。

競合他社のお出ましよ、とケイトは応え、こつちは任せて、と付け加えた。そして、

UILに向直り、ミルズを援護するよう伝え、麻宮と五代の追尾に着手した。

入口の階段を背にしてメインストリートに臨むときの下手側は、低層建築の集落だった。ケイトは麻宮たちが消えた路地口に向かつた。

麻宮が迎撃を試みた。

ケイトは機敏に反応し射程から転げ出した。さつと体勢を立て直す。麻宮たちが路地裏を駆け出したのを察知し、ケイトも音源と併走し始めた。スリットから人影が覗く。幅が狭く、銃撃は難しい。さしあたってはマークを続けることが先決だつた。

麻宮が隘路を往く。麻宮もトーチカ越しにケイトを気にしていた。得も云われぬプロポーションにアニマリティを温存した魂を宿した白人女は、武装していることもあつて、侮ることができない。

隘路では日本人離れした麻宮の体躯が災いした。麻宮は迫りだしたコンクリートや

壁に立て掛けられた廃材との接触を回避できなかつた。

麻宮・五代が侵入した径とメイン・ストリートの間には、こじんまりとした建物が密集していた。尤もその大半は半壊していたし、随所にメイン・ストリートへ至る枝道もあり、麻宮・五代の辿る径とメイン・ストリートは相互に全くのインヴィジブルではなかつた。

散発的に銃火が飛び交つた。麻宮が半壊した建物の陰からメイン・ストリートに対して発砲すれば、ケイトはすかさずカウンターを放つた。

移動がてらの銃撃戦だつたが、やがて、互いに見失つた。双方、物陰で様子見を余儀なくされた。

あからさまな気配がした。麻宮もケイトも反応した。銃声が重複した。

気配を放つたのは、不用意に大階段を昇り詰めた綾香一行だつた。殺傷能力を擁したス

コールが綾香たちを襲う。東尾と本木は我先にと綾香の陰に隠れようとした。綾香は、滑稽なダンスを踊りながら、物陰を目指して移動を始めた。東尾と本木は綾香の移動に合わせた。命からがら避難を遂げてから、やつと綾香が東尾と本木の行動に対して怒る権利があることに気付き、ミュールを手にした。

ミルズが迫ってきた際、奈津樹は元春に逃がされ、メインストリートには戻らずに前進を続けていた。

建物と塀の獣道と称しても差し支えないだろう悪路や毀れた壁を腹這いになつて潛り抜けたりした。途中で、泥濘にも出会せば、瓦礫の通せんぼにも遭つた。どれだけ移動したのか、奈津樹本人も皆目見当がつかなかつた。一旦、休憩せねば倒れることが必至におもえた。通り抜けるために足を踏み入れた建物だつたが、適当な物陰に潜

り込んだ。自ずと肩が上下し、形のよい乳房が揺れる。汗が眼に染みた。手の甲で、貌の汗を拭う。足許のガラスの破片に映った己の姿に、奈津樹は眉を顰めた。まるでシンデレラだつた。

一服を終え、物陰から抜け出した。奈津樹は愕然とした。すぐ傍に人の姿があつた。愕いたのは相手の方もまた然りだつたらしく、奈津樹と同様に凝固していた。相手とは五代だつた。ややあつて、二人同時に相互に指を指しざま唸つた。

五代の頬に赤みがさした。五代は万感の思いを込めて飛び掛かつた。

五代の動きがつと封じられた。

奈津樹のスタンガンが五代の頸筋を捉えていた。恨めしそうに奈津樹を見上げながら五代は気絶した。

元春がクレーターを迂回し終えるのに前後して、彼岸にミルズとウイルが現れた。元春

を発見して色めきだつのが遠目にも判つた。元春は、慌てて、此岸の建造物の密集する界隈に姿を消した。

地上は色彩豊かな天空とは対照的だつた。眼に映るもののが殆どが色味を喪つてゐる。

どこまでも続くトマソンは、元春をしてモノクロームの写真のなかに迷い込んだような錯覚を催させた。路地はやはり入り組んでいた。足許は雑草と瓦礫に埋もれている。横歩きせねば通れない箇所もあれば、身を屈めねばならぬ箇所もあつた。汗が眼に染みた。元春は暴々しい手つきで眼を擦つた。

元春とミルズ・ウイル、麻宮とケイトが揉めている隙に、こそこそと駒を進めているのは綾香たちだつた。匍匐前進という手堅い手段で随分と入口の階段から距離稼いだ。東尾と本木が場違いにも劣情を催す一幕もあつた。

匍匐前進のさなか、先にそれに気付いた

のは本木だった。つと本木の動きが鈍った。

東尾は訝つて声を掛けた。東尾は本木が応えとして寄越した目配せに従い、視線を巡らせた。そして、大きく眼を見開いた。

綾香のたわわな胸が圧迫され弾けんばかりの形になっていた。

自然、東尾の動きも鈍つた。綾香は二人のペースダウンに頸を捻つた。

考えなしに前進を続けた元春の位置は、実は、メインストリートに隣接した路地だ。メインストリートは元春にとつて左側を走っていた。しぶとく崩落を免れているコンクリートの壁とメインストリートを隔ていた。

行き止まりが、元春の行く手に立ちはだかった。遣り場のない怒りに堪えるために天を仰いだ。気持を切り換えようとしたとき、靴音を聴いた。元春は焦つてその場を離れる。右往左往の果てに、別の径へ続く壁の破れ目と対面した。同時に、刺客二人組とも対面

した。

踏鞴を踏んで立ち止まつたミルズ・ウイルと元春の視線が絡んだ。

ミルズが拳銃を、ウイルがショットガンをそれぞれ構える。

元春が地面を蹴り上げる。

重複した銃声はその音压だけでも殺傷能力を湛えているかのようだつた。

直前までの元春の位置に面していた壁がフルメタルジャケットの銃弾によつて穿たれ、散弾によつてスペッタリングされた。

元春が転がり出たのは、メインストリートだつた。元春の体躯によつて砂煙が舞つた。

ただならぬ銃声は、アナウンス効果抜群だつた。這い蹲つていた綾香・東尾・本木は勿論のこと、鍔迫り合いの渦中にあつた麻宮とケイトさえも反応した。元春が出現したのは、メインストリートの突き当たり

であるT字型の交差点の辺りだつたため、全方位から元春の姿を視認し得た。

つと東尾が起きあがつた。

麻宮もケイトも接近戦の相手をそつちのけにして元春に意識を振り向けた。

元春が飛び出してきたクレバスから、満を持して、ミルズとウイルが現れた。

綾香・東尾・本木の貌が愕きに覆い尽くされる。麻宮が銃を構えようとする。ケイトがすかさず牽制を試みる。

ミルズとウイルは周囲の緊張にお構いなしに悠然と手に提げていた火器を持ち上げようとした。

「大人しくブツを渡せ。そしたら、生命だけは見逃してやる」

ミルズの外国語が元春に通じるはずもなく、元春は困惑するしかなかつた。遅まきながら言葉の壁に気付いたミルズは、ケイトを探して辺りを見回した。

「ケイト、きてくれ」

奈津樹も元春出現の目撃者だつた。奈津樹は件のT字型の交差点に面した建物の裡に潜伏して元春を待つていた。すると、突如、元春が視界に飛び込んできた。度肝を抜かれている間に、刺客たちが一斉にメインストリートへ姿を現した。奈津樹は我に帰つた。取り

乱しているうちにバツクパツクの中身のことを思い出した。リスクーな手だが、これしかない。奈津樹はバツクパツクに手を突っ込んだ。

「手こずらせやがつて。このバッドボーイが」

トスした。

「大人しくブツを渡せ。そしたら、生命だけは見逃してやる」

ミルズとウイルは奈津樹の外見に困惑するしかなかつた。遅まきながら言葉の壁に気付いたミルズは、ケイトを探して辺りを見回した。

「麻宮と対峙していたケイトが、麻宮を睨みつけたまま、声を張り上げた。

「じやあウイル、私と交代して」

ウイルがミルズを見る。ミルズは頷いた。

ウイルがケイトの許へ向かおうとしたとき、  
拳大の飛礫が元春とミルズ・ウイルの間に  
降ってきた。

逃げろ

声の主は奈津樹だつた。

元春は弾かれたように脚を縛れさせながら  
その場から離れようとした。

ミルズとウイルも機敏に反応した。

ケイトもミルズ・ウイルに促されて麻宮を  
解放して、身構えた。

拳大の飛礫とは、果たして、手榴弾だつた。

奈津樹が両手一杯に掴んだ四・五発の手榴弾  
をサッカーボールのスローイングを真似て投擲した。  
そして、手榴弾の散らばつた辺りに銃を向け  
た。元春が思わず接触を受けた鰐のように飛  
び跳ねるが早いか、乱射した。

見事、命中した。

命中するや、爆発が起きた。

その爆発が誘爆に次ぐ誘爆を惹き起こした。  
忽ちにして、交差点に煙幕が張られた。

元春は前のめりに転倒した。

ミルズもウイルも無様に尻餅をついた。

ケイトは壁に叩きつけられた。

麻宮は横飛びに物陰に飛び込み、爆風の

直撃は免れた。

綾香・東尾・本木は、爆風に舞い上げら  
れ砂塵をたっぷりと浴びた。

生きた心地がない元春が茫然としている  
と、煙幕を掻い潜つて接近してくる人影  
があつた。

奈津樹は元春を引つ張つて避難をはじめ  
た。

マイクロバス程度のサイズの岩がひしめ  
きあう浜だつた。この浜はどうやら開発が  
見送られ手つかずのままらしかつた。岩と  
岩の間隙は脈絡を成していく、迷路よろし  
く複雑に入り組んでいた。

元春と奈津樹が駆け込む。追つて、東尾・本木・綾香が、麻宮・五代が、ミルズ・ケイト・ウイルが次々と迷路に突入した。岐路につぐ岐路で、逃げる側も追う側も右往左往せざるを得なかつた。だが、時折、奥まつた位置の岩と岩の隙間を人影が横切つた。

追つ手同士が鉢合わせになりもした。五代と本木が出会い頭となつた。

「テメージやねーんだよ」

「生憎こっちもだよ」

東尾の罵声に五代も応酬した。

迷路を辿ることに苛立ちを抑えきれなく

なつたケイトが離れたスリットを横切る人影に向けて発砲した。銃弾が岩肌を抉り砂礫が音を立てて地面に降り注いだ

ウイルがケイトの腕を掴んだ。ケイトはウイルの貌を見た。

「危険すぎる」

ウイルはかぶりを振つた。ミルズらは一塊りになつて行動していたわけではなく、同士

討ちの恐れがあつた。ケイトは寡黙なチーフメイトの制止を受け容れ、ハンマーを解除した。

麻宮が頬を上気させ隘路を急ぎ足で進む。足場は凸凹で勾配も上がり下がりしている。何度も足を滑らせたがいずれも転倒は免れていた。いつか五代とは離れ離れになつていたが、問題にしなかつた。

ウイルが悲鳴をあげた。ミルズとケイトは云うまでもないが他の連中もすわ有事かと緊張した。

切迫した様子でミルズとケイトがウイルの許へ駆けつけた。

ウイルは苦痛に身を捩らせている。ミルズとケイトは我先にと、ウイルの傍へ駆け寄つた。

「どうした」「ウイル」

ウイルは自らの足許に視線を落とした。ミルズもケイトもウイルの視線の先を見遣

る。ウイルのアキレス腱を蟹がハサミで掴んでいた。情感たっぷりに被害を訴えるウイルを余所にミルズは髪を撫でながら貌を背け、ケイトは溜め息混じりに両手を拡げてみせた。

対になつた足が砂を蹴り上げてゆく。足跡はディボットとなり後続にとつて微々たる障壁となつた。運動神経に難のある五代などは転倒さえした。

心なしか、併走する元春と奈津樹が浮かれているように見えた。方々からの追っ手に追い立てられているというのに、元春も奈津樹も時折、笑みさえ零した。

「ウチらってMなのかなあ？」

「オメーはSだよ」

そう揶揄する元春に奈津樹が体当たりを喰らわせる。

「あ、そうだ」

奈津樹が独りごちた。元春が奈津樹の横顔を覗き込む。

「あのビーエムのオッサンさあ、アタシ絡みみたい」

「どういうことだ？」

「あのオッサン、以前にアタシがカモツたオトコに雇われたみたい」

元春は苦虫を噛み潰したように貌を顰めた。

「揉めたのか？」

「それが心当たりがなくってさ」

奈津樹の右手の薬指に填つた指輪の鉱石が鈍い光を放っていた。

五代は、いつか迷路を脱し、砂浜にいた。主戦場は依然として岩の迷路の内側で、靴音が往き交つていてるのが聴こえた。迷路に引き返そうとしたとき、銃声がして、怒号が飛び交い、靴音のピッチが上がった。五代は俄に意氣消沈した。

麻宮もまた岩の群集を行きつ戻りつしな

がら元春・奈津樹ペアを追つていた。岩が視界を遮つてゐるせいで状況が判らない。麻宮はやきもきさせられながらも根気強く前進を続けていた。

角で、他人と出会い頭になつた。麻宮は反射的に拳銃を衝きだした。

麻宮にも照準が合わせられていた。相手は、ケイトだつた。

麻宮とケイトの視線が拮抗する。互いに鉄爪を引くことに躊躇いを覚えた。さしたる由もなく地上から消し去るには余りにも惜しくおもつた。

「英語判る?」

ケイトが慎重に切り出した。

「多少なら」

「敵の敵は味方じやない? 決勝戦は最後まで

とつておくものよね?」

ケイトは流し目で麻宮に直談判した。

麻宮は無言だつた。ケイトの貌を注視し続

かつた。

つと麻宮が息を吐いた。

やがて麻宮とケイトは擦れ違いながら駆け出した。

東尾とミルズがかち合つた。ミルズが拳銃を構えようとした際に、岩に銃身が引っ掛かり、もたついた。すかさず東尾は突進した。

「こちとら元プロだつての」

ミルズが跳ね飛ばされ、その弾みで擊鉄がファイアリング・プレートに叩きつけられ、マズル・フラッシュが焚かれた。

東尾はショルダー・タックルを浴びせかけるやその場を立ち去つた。

「何であそこのママと深作一家の二人組が

ツルんでるわけ?」

「識るか」

「それにしてあのオバサンカモるなんて、

アンタ年増好み?」

「カネだ、カネ。誰が好き好んであんなババア……」

前方の岩陰から何者かが現れた。元春と奈津樹はピッチを落とした。二人の前に立ちはだかったのは、綾香本人だった。元春と奈津樹は、方向転換よりも先に、どこまで会話を聴かれたかを気に懸けた。須臾、綾香は黙つていた。二人の間に希望の光が点つた。胸を撫で下ろそうとしたとき、綾香が楽譜に表せないくらい低い声を発した。

「誰がババアだ

筒抜けだった。

元春も奈津樹も、遣る瀬なさに項垂れ、か

ぶりを振った。

「このクソガキどもが

綾香が髪を振り乱して迫ってきた。元春と奈津樹は慌てて逃げはじめた。

綾香に猛追されるうちに、元春と奈津樹は迷路を脱し、砂浜に出た。

陽は大きく傾き、海は蒼から紅にその色彩を変えていた。元春と奈津樹はふと後ろを振り返った。綾香を振り切れていないことが判り、砂浜を奔りだすしかなかつた。

元春と奈津樹が波打ち際を奔る。元春も奈津樹も背後に追走者の気配を感じていた。二人の予想に反して、最短距離につけていたのは五代だった。五代は結局、砂浜で待っていた。

「待て」

いつか五代の眼鏡には鱗が入っていた。仕立てのよいスーツは埃や泥で台無しになつていた。

「指輪返せ」

云わせも果てず、五代のピッチが下がり、相対的に元春と奈津樹から遠離つた。

元春と奈津樹は貌を見合させた。元春も奈津樹もその真意を量りかねた。

いつか砂浜に全員の姿があつた。五代に油揚げを浚われた格好になつた綾香が失速

した五代を追い抜いた。だが、すぐさまケイトが綾香を抜き去った。

「指輪を渡しなさい」

英語だつたが、「リング」と「プリーズ」という単語の列びなので、さすがに元春も奈津樹も判つた。

「だから指輪つて何なんだよ?」

ストライドの広さと膂力を活かし迫りくるケイトの脅威に堪えながら、元春が叫んだ。

「あ」

不意に奈津樹が素っ頓狂な声をあげた。事ここに到つて、奈津樹は自らが蒔いた胤が何たるかを悟つた。

奈津樹は、弧を描いて減速し、くるりと踵

を返した。元春は不可解な奈津樹の行動に戸惑いながらも踏鞴を踏んで立ち止まつた。奈津樹たちにつられて、追つ手たちも奔るのを止めた。

やおら奈津樹は右手の薬指から指輪をもぎ取り、高々と頭上に翳した。

その指輪に装着された鉱石は、名をピングダイヤといった。希少価値のある鉱石だつた。奈津樹がくすねた五代所有のこの鉱石は、そのカラット数からして、日本円にして億単位の値をつけるものだつた。五代はこの鉱石の代金を市場カジノに注ぎ込む算段だつた。ミルズらはクライアントのオーダーに従い、この指輪を狙つていた。五代、ケイトに追いついたミルズ・ウイルが口々に、奈津樹に呼び掛けた。さながらオーケーション会場の様相を呈した。

指輪とは無関係に二人を追つてきた綾香まで、その鉱石に魅了され、オーケーションに混じってきた。

鉱石を凝視したままだつた奈津樹が、すっと視線を水平に戻すと、鉱石を競り落とそうと喚き立てていた連中が静かになつた。奈津樹は微笑んだ。琥珀の紗の裡に佇む奈津樹は、神々しささえ醸しだしていた。

奈津樹は、躊躇と海を向いた。狼狽える

追つ手たちを余所に、上体を捻つた。

ピンクダイヤが放たれた。飛翔したピンクダイヤが夕陽と重なった。得も云われぬ反射をあげた。その反射はその場に居合わせた者すべての胸を射抜いた。尾を曳きながら、ピンクダイヤは焼けた波間に吸い込まれていった。

五代が膝をついた。ミルズたちも毒気を抜かれた。ミルズは大の字になつて砂の上に倒れ込んだ。綾香もその場にへたり込んだ。麻宮は膝上に手をつき、水平線を見て眼を細めた。

暗黙の規制によりどうしたらいいのか判らずに手を拱いていた東尾と本木が元春たちの拿捕に取り掛かろうとした。

「もういいわ」

綾香が一喝した。東尾と本木は訝りながらも作業を中断した。

元春がそつと奈津樹に近寄った。二人の視線が絡んだ。

「これでよかつたのかな？」

「さあな」

「けどよ、ぜつてえミホが間違つてるつ

て」

奈津樹は反論しなかつた。

二人はどうちらからともなく唇を重ねた。

串刺しになつた牛肉や鮑や玉葱が火炙りにされ音を立てる。辺りには芳ばしい匂いが漂つている。

「呑みものは行き届いた？」

本木が訊くと、全員が生ビールのジョッキやワイングラスやシャンパングラスを掲げて返事をした。

決戦の舞台となつた砂浜で、ついさつきまで敵対していた連中がバーベキューを囲んでいる。

竈をつくり火を熾したのはウイルだつた。

元春とミルズが肉と野菜を、麻宮と東尾が酒類を調達した。海鮮類はケイトが海から採つてきたものだ。

一通り準備が整い、いざ乾杯となつたとき、誰が音頭をとるかで糺余曲折があつた。混乱に乗じて、元春が号令を掛けた。グラスの触れあう音が和音を鳴らした。

和気藹々と宴は進んだ。ウイルと本木が焼きもの係になり、全体に奉仕した。元春と奈津樹が輪の中心にあってはしゃいでいる。綾香は積極的にミルズに迫つているが、ミルズは気まずそうな愛想笑いで応えている。

東尾が元春の隣に坐り元春の肩を抱いた。

「その節はすみませんでした」

元春は頭を下げた。

「いや、背中を押して貰つたようなもんだ。それに、上の連中も渡りに舟だつたんじやねえか」

東尾は言葉を区切り綾香を見遣つた。

「けどよ、民間つて辛えんだな」

元春と奈津樹は頸を傾げた。

失意の五代は、ただならぬピツチで次々とグラスを空けている。麻宮とケイトは、片言の英語で会話を交わし、すっかり意気投合している。

宴たけなわのとき、陸側の夜空が赤く染まつた。程なくして、サイレンの唸りが彼方から聴こえた。

警察車輛の大群が押し寄せてきつつあった。一同は、祭の終焉を惜しみながら、ゆつくりと腰をあげた。

「よお」

東尾だった。

「異人さんたちだけでも逃がしてやんねえか」

麻宮が補足した。

「彼らは掴まつたら本国の連中に消されかねない」

麻宮は不安げに寄り添つてきたケイトに

接吻けた。

「でもどうやつて？」

砂浜の端に、一隻のボートが係留されていた。恐らくは個人所有のものだつた。

「決定」

元春が銃を抜いた。奈津樹はミルズたちに手を振つて手榴弾を二・三個用意した。綾香と東尾と本木はミルズたちからそれぞれ火器を譲り受けた。麻宮も弾倉を銃弾で埋めた。泥酔した五代は、空き瓶を逆手に持つた。

ミルズたちのボートが出航するのを見届けると、残る元春たちは陸の方に向き直つた。

「いざ」

全員、一斉に駆けだした。

元春と奈津樹は逮捕され、銃刀法違反・窃盜の容疑で起訴され、実刑判決を受け、二人ともこれに服した。服役は数年間に及んだ。あの夏から、十年が経つた。

安アパートの一室の棚に置かれた写真立てに収まっているのはミホの写真だつた。

元春も奈津樹も随分と様変わりしていたが、元春はやはり元春だつたし奈津樹の左肩には相変わらずカートが棲んでいた。

「ミホ」

ベビーベッドを覗き込み、二人揃つて、

娘の名を呼んだ。

RazorEdge

# Sparkling Spirits

だから | スパークリング・ワインなんて生ぬるい。